836
209
3

萃草年録

元治甲子紀聞

十七

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

元治甲子紀聞 一

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

國學院藏書

甲子紀聞第一輯

一 元旦江戸来書 四脱ス七日ノ出路ノ条帆ノ字ヲ申戌備

二 仝 四順ス四日薩州拝借之蒸気船長州ヲ乗切ヲ沈溺

三 将軍家去八日大坂ヘ着帆当暮十五日入京ノ旨ノ達

四 正月六日右大臣御轉任宣示御頂戴

五 在府牧野某手留

六 在太田成宮岩下某手束 四冬十二月六日瑞龍院応接

七 薩州小倉ノ屋敷去十月廿四日長州進入兵船打ヲ受ル

八 長州ノ屋敷同上ヲ受ル

九 在府某氏手留 ヲ欠ク

十 正月十日船垣侯ノ屋敷領内ヘノ京私入達ニ付大正 9. 5. 27 縮小

十一 立花侯ノ屋敷ノ出路ヲ當ル時ノ景況

十二 越前屋敷 日ノ春嶽御所参内ノ先口

十三 戸田越前守家来内意ヲ族大和守和ヲ手段ノ乱

十四 松平近江守ノ屋敷 新宿ノ浦和ノ内藤紀伊守参行引移

十五 青山下屋敷ノ越前守屋敷ノ出路ノ景況

十六 井上河内守屋敷ノ出路ノ景況

十七 大関兵庫頭ノ屋敷 四受取和ヲ田越前守ヲ受取ノ参行引移

十八 水野日向守屋敷 青天ノ東金

十九 加納備中守ノ屋敷 ヲ欠ク九ノ日上

二十 板倉内膳正ノ屋敷 ヲ欠ク二日上

二一 板倉ノ屋敷ヲ秋元ノ参ヲ秋ヘ ヲ欠ク八ノ日上 二月八日

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

㉓ 甲子正月十日因州侯建白 ㊞名ハ省略

㉔ 長防二国探索甲上 子正月

㉕ 長州富子右六卿之上書 正月廿七日

㉖ 正月廿一日 宸翰写

㉗ 高田侯ノ留守居手簡ノ入京ヲ止メ帰国ヲ促ス 二月三日

㉘ 窪田氏請音手簡 二月三日

㉙ 一橋殿ノ後見ヲ免ス

㉚ 若州ノ教言ヲ免ス 同日

㉛ 井上河内ヲ免ス 同九日

㉜ 嶋津三郎朝臣ヲ参与兼務ヲ以テ大将ニ任ス 二月十日

㉝ 南都興福寺 山陵修補ノ賞従四位下 宣下ヲ仰ク

㉞ 戸田鐘太郎攻馬ノ事ヲ告ケ後ニ作ル

㉟ 井上河内ヲ免ス 同九日

㊱ 若州ノ教言ヲ免ス 同日

㊲ 牧野越中守官 同日

㊳ 西尾久世両侯江戸大手三ノ門格勤ヲ命ス 作ル

㊴ 牧野越中守官 同日

㊵ 嶋津三郎朝臣ヲ参与兼務ヲ以テ大将ニ任ス 二月十日

㊶ 南都興福寺 山陵修補ノ賞従四位下 宣下ヲ仰ク

㊷ 戸田鐘太郎攻馬ノ事ヲ告ケ後ニ作ル

㊸ 書ヲ以テ告ク

㊹ 西尾久世両侯ヲ免ス 二月十日

㊺ 鳥津三郎ノ馬鞭ヲ奪ヒ二條登城ヲ止ム 正月十九日

㊻ 土方勝任ヲ代治ノ官ニ

㊼ 浄国寺高塀ヲ張ルヲ止ム 同上五箇

㊽ 京都奉行ヲ廃シ所司代ヲ置ク 二月十六日

㊾ 金沢侯五万石ヲ加増 二月十日

㊿ 南都興福寺従四位下 宣下ヲ賜フ 作ル

(51) 日本貿易新聞 四十五号 二月九日

(52) 信州諸侯ヲ方ヘ誘陣ヲ促ス非常人数出ス ノ達

(53) 大久保忠寛ヲ徴スル ノ命 申ヲ以テ出ル ノ刻ヲ告ク 二月廿日

(54) 別條三件

(55) 永井尚志ヲ軍艦奉行ニ ノ命 下後国八ノ市場ヲ開ク事ヲ仰ク事ヲ仰ク事ヲ仰

又
㊅ 因州執政荒尾但馬建白并返簡届
㊆ 二月廿二日依召幕下四条門ニ至
㊇ 高鍋侯建白 二月
㊈ 大坂別状 二月廿六日薩人大谷仲之進齎
㊉ 在府某氏手柬 二月廿四日
㊊ 嶋津大隅守建言并評 二月
㊋ 京師文通 薩長評
㊌ 全 同上
㊍ 追悼義勇士墓 元治甲子仲春
㊎ 大坂大和橋ヶ梟首伊賀守并高瀬橋張紙ホ
㊏ 長州ヲ使ホ列侯并和宮ヲ敬言衛ホ名前 三月初ノ紀
㊐ 右同郡山侯ヨリ
㊑ 仙侯敬ヲ諭ノ為ノ勅ヲ奉行
㊒ 実説 長州吉川ヲ名ヨル 英蘭艘長州ヲ使ヲル
㊓ 勅書并御請書寫ノ同郡
㊔ 阿部越前守ヲ罷ノ始末
㊕ 貞松院様ノ看病願 三月廿二日
㊖ 京都御警衛 三月十七日ノ廿五日
㊗ 問策十則 尾州周旋方即答
㊘ 備前侯建白 三月
㊙ 御沙汰書 三月廿三日ヨリ至日廿九日及ヲ両ホ

神 八十七十二両
閣老方ヲ諸侯ヲ延
年号文字ヲ
ホ此建書ハ白石ト云ヒ三月廿五日長州ヨリ書ヲ使ヲ以テ
中将殿ヘ差進

㊀ 筑前世子上書 二月廿四日
㊁ 會津侯軍事徐戴妻嶽ヲ守護職改名大藏大輔 二月廿六日
㊂ 五月廿七日勅書并御請書寫ノ同郡 二月廿五日
㊃ 三條大橋西詰西側塀張紙寫 二月廿二日
㊄ 全 二月廿三日付 京師機密
㊅ 嶋津大隅守ヨリ島刀并薩州侯ヨリ服ヲ辞候 二月廿三日
㊆ 元治ヲ改元 京師 慕孝 三月朔日
㊇ 四ツ旅館本陣附 甲子春
㊈ 毛利左京亮様ヨリ山系ヨリ次第
㊉ 長州ヲお尋ヲ

㊊ 筑地出火 三月廿日 英国ホ新公使ヲ以テ
㊋ 土井家ヲ以テ松平刈谷侯長州ヲ
㊌ 加州ヨリ 大坂ヲ侯ヲ者三月十九
㊍ 岡崎侯ヨリ城来ル両
㊎ 右近将監ヲ祖父ヲ宥ヲ文ヲ後和泉守両ヲ二日
㊏ 衣服ヲ制 三月六日
㊐ 在府某氏手柬 成田辺毛集浪士
㊑ 尾張厳建白 三月
㊒ 筑前家浪士禁獄ヲ者ヲ奪去事 三月
㊓ 日本貿易新聞 四十八号 三月朔日

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

(一)甲子元日在府某氏手帖　人日連
日獵廿七日弥　御上洛の軍艦にて御発帆
の由に繋舶廿六日着岸の旨御通達
薩州藩廿四日着岸の筈の処未着
の由に繋舶廿六日着岸の旨御通達
の由に繋舶廿六日着岸の旨御通達
の由に繋舶廿六日着岸の旨御通達

一　甲子元日在府某氏手帖　人日迄

四朧廿七日孫　御上洛の軍艦ニ乗組候ニ付右御苗字中為御用心丸
之内ハ不及申ニ府内中小路ニ有之新ニ木戸相立候屋
鋪前新ニ橋ハ新ニ而番所相建以上木戸ト切ニ相成候ニ付屋敷ニ通用門ヲ以ト切ニ
往来不相成三丁廻リ一昼夜ニ而参廿四日付弐度ニ而其外ハ徒士目付下目付
当時半ニ相廻リ誠ニ厳重ニ而参候ニ付還御近ク成候ハヽ御よせ
ニ而参ル　御上ニ而ハ出勤ニ而御座候ニ付頂戴ニ相成ニ而ハ拝領ニ
相当リ候ニ付　ヨリ領ル

二　在府某氏ヨリ来

薩藩ニ而四日着ニ而参ル而ハ着ニ而参ル一隻
の内ニ撃沈ニ而大砲数十挺打ヒめ廿人計溺死ニ而薩ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用　　挟み込み物

為可奉安ト沙汰ニ及ヒ候事等ハ薩州ヨリ
取計ヒ候筈ニ候事ト

右之通被仰渡候ニ付テハ實ニ容易ナラサル
風評モ有之候ニ付テハ篤ト御評議ノ上
御着京ノ節ハ御警衛ノ向厚ク
可申付事

三

一今般徳川八日大坂　御城ヲ
被為引拂候通　御委細ハ別紙
當五日大坂表　御着京ノ上
御沙汰ノ一
御着京ノ上ハ　御委細ハ別紙ノ
通リ
十五日　御入京ノ上ハ
御着京ノ上ハ
御着京ノ上ハ

四　右大臣ノ轉任

一昨廿日　勅使二條　御城ヲ參入
諸名ヲ以　右大臣　御轉任ノ義ニ付
御辭退ノ義ノ御遊ノ義厚
ク遊ハス候ニ付　御參
内以前
速ノ
御參
内

右之通考立二日於二條　御城ヲ　御對顏有之候ニ付
右之通從　宣下旨被
仰出候事。　二月八日

五　在府牧野某手當　二月七日

當春先別紙ノ不業京師ノ何藩騷ノ發亂ノ
御城ヘ被為　召大評定何ノ事ノ不相分ノ
阿州因州兩侯ハ殘リノ申亂ノ
四參藩ノ外ハ十發程打ノ由ノ
死失二十四五人

[illegible]
[illegible]
[illegible]

…ニ申込ニ付…
…ハ…
…艦と…
…ニ…
…ニ…
…ニ

領内白野江村青濱ヨリ沖ヘ繋ギ船仕候処、右船中出火ニ付、
小舟ニテ領内ヘ上陸致シ候者有之ニ付、相当ノ御手当左右ヲ
田ノ浦ヘ繋ギ船ノ致心細ニ付、長州ヨリ砲撃致シ候ハヽ、
申ノ弾丸打込ノ様子ニ付、急ニ青濱沖ヘ退キ船休息致シ候ハヽ、
煙吹出シ候ニ付、同処ヨリ火気陸船ヘ移ル様ノ意ニ及ビ候ニ付、
直ニ一同浦防致シ候ニ付、行届積ニ候ハヽ、迚モ火急ノ節ハ
引退キ候ヘ共、長州弾丸ヲ出火致シ候ニ付、金箱其儘ニ
仕置キ候ニ付、城下町屋ヘ為致出火候
ハヽ申ノ下ノ弾丸ヲ以テ領内ヘ上陸仕候ニ付、
為ノ人数ヲ更ニ行届キ候ヲ以テ船ヲ多ク、差ノ焼失仕候ニ付、右ノ
通リ取リ合ヒ申上候以上

三月廿四日

小笠原大膳亮殿
桐原立部左衛門

九

鳥羽ヨリ四日長門国豊浦郡府中沖合ヘ異国船一艘上陸ノ
砲台ヲ相囲両度打掛ケ候ニ付、夜ヲ以押寄砲撃ノ
ヲ以テ襲ヒ、右及砲撃ノ節ハ最初ノ内住ノ次第ニ
船ヲ出シ候ヘ共、其後ハ陸ヘ
船ヲ繋ギ候ニ付、右ノ通リ取リ合ヒ申出火ノ節ハ及砲撃
打掛ケ候ニ付、陸ヘ上リ候ヘ共、早速以飛札及問合
内修理大夫殿ヨリ家来ヲ以テ手当ノ為メ多人数被指越
支度ニ候間、其心得ニ付ヲ以テ使者ヲ以及報告
候ニ付、右ノ通リ取リ合ヒ申出候以上

三月九日

在府某氏ヨリ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

上方徳閑港之説昨冬風多仕ル得ス全ク浪説ニ基書ルところ人心動ふ
ナル長州ヲ京師ヲ去ラシメ外在京不相成ヲ仰出ラル種子故上京其談頗ル捗ユクヤ
閣老諸長之間疎甚敷種子ハ薩三郎君上京ヲモ無ク悠々ト外海ヲ乗リテ長州海ヲ通航
不致ヲ程ノ事ニ付一同会議ヲヲモ云ヘハ筑前始薩國四侯ノ
京師ヲ挽成ヲ頼ルヲ風説ヲ有テ孤立ニハ困ル我ニ相手ハ会津候ヲ冬ヲ建ル
ニ開港之説ヲ此度鎖港ヲヲ何ヲ子細有ヲ事ヲラントヲ事ニ覚ト幕下ノ
廿七日解纜ヲ同夜神奈川ヘ八日浦賀ヲ発航ヲ後ハ如此故ヲヲ
ニ着京ヲヲシヲヲ是又保キ故一ノ看ヲヲ
幕下ヲ去月八日浪華ヲ着津ヲヲ事ニ候ニハ途中仏船ヲヲ避ケヲ一日ヲ遅着
ヲヲ事実否如何哉 二月朔

(十)

昨四日夜戌刻ヨリ私領分志州的矢浦ヘ 御意私入津ヲ碇泊被為 在ル旨
所海岸為御警衛御筋ヲヲ差出ヲ着申候ニ付私儀即刻ヲ羽表ヘ出張仕
御機嫌ヲ窺ヒヲヲ同四日ヲ同所ヘ発航今卯刻ヲ
ニヲ当惑引取申候ニ付依ヲ同所ヘ御警衛ヲ外ニ海岸ヘ兵士ヲ差出ス人数引揚申候ニ
ヲ申上候以上

二月十日 十一日出ル

稲垣信濃守

(十一)

元治甲子京邸表ヨリ守衛限月ヲ有四備ヲ北八日御解ニ
仕合ヲ有ノ処ヲ 御与洛ヲ 仰出ニ相成ニ付当ヲ学ヲ再ヒ心
底ヲ所ヲ写ヲ用筆傳 裏ニヲ有ヲ文ニ同ヲ学ヲ再ヒ心ヲ有ヲ写ヲ用筆傳

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

御守ヲ初メ和歌ノ短冊ヲ添ヘ差ヲ向ケ警衛ヲ為ス事

二月十七日

(十三)

春山獄ヲ去ル五日改条　内外条縁無ク条上ケ

退散　禁中并ニ摂家門々宮寺相中将家ヲ始メ

二月十七日

(十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(二十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(三十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(四十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(五十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(六十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(七十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十七)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十八)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(八十九)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十一)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十二)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十三)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十四)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十五)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ願ヒ出ル事ヲ其比ハ各様ヨリ御沙汰アル可キ旨ヲ

二月十七日

(九十六)　布告　敵味方家来内意

敵味方ノ家族戸田大和守ヲ始メ当四日ヲ以テ礼条　内々奉拝

龍顔ヲ拝シ候事ヲ願ヒ　御陵ヲ初メ勤王ノ廉ヲ

再度獄礼ヲ申拝　就テハ各位各思召ノ趣ヲ

以テ

四日辰中寺於領内先神山者取計之
水戸殿へ及引合為取扱可申旨方行国為之並大橋玄蕃
之者取敢山寺七日引度山麓左所仮小屋ニ
引度山者谷前

所　九一郎　石井幸吉　水野源之助
西谷治平　村上小次郎
布目伴之助　山本幸助
玉井為助　為井為吉
戸田敬蔵ニ而申之

右之者昨十六夜浅草田町武丁目辺ニ旅宿致居以
(十七)
屋敷世文郎屋仙蔵方ニ私人数廻り先ニ申出下
為ニ方行燈ニ名狼藉ニ及下剋ニ相成
先ニ佐ニ仕候ニ付捕押下廻り相撃ニ候処全両刃ニ
(十八)
私左所下総国猿島郡(城下)五町深浪人弥之者徘徊仕候ニ付
条々別忍廻り方厳重ニ仕候ニ付先ニ而ニ
乱妨ニ者ニ而又ニ武州郡域原村百性長兵衛ニ
者ニ去ル七日国小河村字新開大村屋作八方ニ
大ニ騒動仕候ニ付捕押下ニ
手負ニ先ニ而ニ

中手勢村ヲ乃剱數代男後手ヲ成手村役所侍ヲ者ノ了紋ヲ有ル而敬ヒ候當
了ル尚委細ヲ多ヲ夜陽追ヲ一ヲ手ヲ止ル

ヲヲ十八日

㊈ 一宮福島両役當

私ヲ所上総國一宮ヨリ二里程北藻原村ヘ浪人三浦帶刀始二十弐人集也ル
當十七日曉七ツ半時頃同國東金宿出役無ヲ
後追懸ケ手ヲ所詰當ヲ共ニ汲手乃右藻ヲ村集也ヲ浪士ヲ同日夜ヲ入人数
先ヲ一ヲ捕ヲ了我於引続同所以下乃小関村役重ヲ板倉内膳ヲ人
数ヲ先ヲ一ヲ捕ヲ了我ル方早速詰合ヲ人数ヲ
ヲ但士ヲ警衛藻ヲ村ヘ泰ヲ乃ヲ家ヲ同村退ヲヲ後ヲ自然ヲ但士ヲ者ハ
ヲ領追跡同ヲ村ヨリ三里程先利金村ヲヲ泊ヲ了ヲ追手浪士ヲ捕ヲ素ヲ

一万八千石
下総結城 藩ヲ
水野日向守

助大平八郎大山ヲ事千葉陣屋ヲ右ヲ人ヲ捕ヲ外野主事ハ討留同ヲ死敵ハ同所後人
ヘ預ヲ一但取扱ハ浪士ヲ在ヲ藻ヲ村東光院内ヲ改取残置ハ合葉ヲ剱術稽古面
小ヲ不有揚ハヲ於ニノ手取扱ニ但引続ヲ我為ヲ敵ヲ浪士利金村ヲ笑ヒ退去ハヲ途
中ヲ及家ハヲ焼ヲ追先ニ一ノ相通ヲ了ヲ程ヲ於テ了ヲ追懸ケ了ヲ先手ヲ時到後
右張番ヲ家ヲ今ヲ十八日宮家一同引取申ハ左ヲ
ヲ四ヘ引渡ハ四ヲ了ヲ所詰家ヲ多ヲ申我ハ時能當申上ル以上

一万石
加納侍中守

㊉ 去ル十七日関東取締馬場後藤逸情取扱部ヲ代官今川要作支配下上
総國山邊小関村田名ヲ大村屋伊八宅ヲ浪人寄集ヲ居ハ付右出役方ヲ
ヲ先ヲ着手ヲ一ハ而東金陣屋ヘ出張為付ヲ人数着手ヲ一ハ松笑國者ヲ
付逸ヲ人数着ヲ而ハ東ヘ浪人ヲ設ヲ而ハ付右ヲ而榊音次郎澤田三郎

ヲヲ十九日

宮嶋七郎伊勢末孫子郎保田法號秋和七外ニ老人名前不知都合七
人訂前申ハ七字ニ而末ニ而稍亜七ニ而ニ死亡仕外ニ怪我人ハ老人ニ而多ク
候出張東ニ而ニ名ニ申越ハ候得共両申上ハ以上

ニ月廿一日

(三)

上総國東金領分三千石計ニ而陣屋有之常ニ代官一人引越居住軽ハ在所
ニ而見ニ両人指遣置ハ候ニ去ル廿二日飛脚ニ而近領浪士八十人余組
ニ而物持ニ而ハ有之ハ四五人ニ而ハ不相知候得共一両日ニ而ハ弐百人ニ
ハ相成候ニ付陣屋ニ而ハ兵粮ハ無之早ニ人数指出候得ハ兵粮
ハ領内騒動仕候ニ付竹槍ニ而ハ防ニ而ハ無之候ニ付ハ安太夫日付三井ニ而ハ
越ハ候ニ付ハ源ニ而ハ安太夫日付三井ニ而ハ元ニ而ハ
八人ニ而朝出立廿七日ニ而ハ東金ニ而ハ泊ニ而ハ故ニ月元日ニ而ハ陣羽織

名ニ而ハ札申上候ニ付ハ名前ニ而ハ無之ニ月廿一日ニ而ハ
馬場俊蔵ニ而ハ途中ニ而ハ
一両日中ニ人数出張加勢ニ而ハ
新宿明日引揚ニ而ハ
ハ支度ニ而ハ
固ニ而ハ
多一郎竹内蔵ニ而ハ
うニ而ハ
ニ而ハ
ニ而ハ
板寺ニ而ハ

り鎗ヲ先ニ立テ次ニ浪士七人前後ヲ警固シテ
井合村ヨリ馬ニ小川ヲ隔テ陽ノ場所アリ、ソコ上味方備ヲ立
伏セ、ソノ内ニ筆セシ事ヲ諸手ヘ達シ、残リ小川ヲ越テ
テ拾人ヲ送リ、ソノ先ニ人ヲ添田清ト名乗ラセ御使ニ
ニ切ヲ先ニ立テ多賀吹ヲ下ル大村屋ヨリ次ニ本人大将ニ
有田ヨリ屋サゲノ事ヲ白地ヲ着セ有田ヨリ着セ人大将ニ
ヲ過去リ大村屋ヲ田ヨリ畑中ヘ備陣有筈ニ
ニ諸道具八州廻リヘ相渡揚ヲ吹ヲ引有筈ニ
トヲ和尚御休ミ下ヲ申ス筈ニ有ニ付如此ニ
過引有申ノ途中恐ニ而酒湯水木持出ス事
井ニ八州廻リ四人ヲ申ス右相御使者ニ
宿申迄追ヘ私ノ後ヨリ手ノ陣ヲ乱ス
詩云
二月十八日
ヲヘ横ヲ向ツ校ヘ宮ヲ希ト申ス
ヲト於ヲ一ノ申ス事ヲ
御手紙物ノ事ヲ
事ヲ申ス
申ス下先ヲ御ヲ新合ヲ
○二月八日第ヲ著中頃ヲ
リ於ヲ陽山流君合親

匠か侍史も將師匠等一若き申ハ酒一滴も呑ハ兵ふて一ふ流書物も
相廃ふ出来家ふ幸後徒ふ至ふ之ふ
御ふ我士(死)ノ多評判宜野ふ之ふ香苑料お係追福事系
武士の義乃和光の矢ふ付ハ
多系如何ふ候哉町ふ公系ふ右和ふ
不敢御ふ申ふ金子弐両封金ハふ和ふ
少下来金墓供ふ花山をふ一香薬お
四ツ切服紙ふ文お辺ふ有ふ之拾ふ
を直ふ一ふ一ふ 翌

二月八日

秋田 秩候

(さく紙候脱カ)

池田英雄

(三)甲子二月十日因州侯建白

微臣 慶徳去冬(二ヶ条)奉蒙 勅命ハ付ふハ登京(速ニ)可仕筈ハ之(之ル)得共傳

斐近及言上ハ通痛不今以荏苒在速ふ旅行仕兼出京延引仕段恐入奉
ハ柄 御下問ふ多ふ候猥ふ及言上ハ候其源ハ(不ヲ)軽ハ得共昨夏上京以来実
ふ蒙非常ふ恩寵毎々系朝

御直命をふ畏ハ候猶更日夜九重ふ御候祀(不堪)憂国ふ(ふ想慮)寝食を
も不安猶又申上ハ柳去秋以来何とふ
を(ロ)穀援称ふ無諸申ハ臣 慶徳ふ朝議今更御動揺ふ多ふ在ハ
其訳ハ先達ふ在京ふ砌系朝ふ都度ふ大臣両卿ふ親英ふ向ハ
於攘夷ふ多ふ 殿慮確然ふ多御候猶一橋中納言八月十八日以前
御沙汰ふ通攘夷ふ多精ふ盡力(之ル)可申通旨以傳 奏被

仰岩叡慮を奉畏旦勤　王之諸藩憤激不待幕命可及拂攘等之
勅命を蒙り其後阿波侍従へ詰合之諸藩追々会集之毎々東下攘拂等之
御催促之御沙汰等も有之引續有栖川宮御下向之　御内意も有之
旁其内於関東攘夷之談判取拵之趣言上之相成候ハヽ暫時之後も決止之筈
幸ひ先中納言再進発頭上京之節ハ猶又嚴重之
御沙汰も相成候旨を以一橋中納言參内之節又大樹上洛之　仰下之節も第一
勅使之為　御迎旁とも　御通行之節ハ
当今中鎖港攘夷之談判相始候ハヽ不宜　思召之趣ニ候ハヽ
置攘夷之
叡慮ハ必貫徹之遂度旨
叡慮　御動揺等之後ハ御手薄之折柄不容易
御動揺之為　在々格別之御手当仕置先全不知実者之女言ハヽ
万民等一右ニ驚騒之ハ自然天下之士民九重之
深慮を窺ひ解体仕候ニ至候哉之趣
至尊之聖徳を奉感戴補相之賢徳之勤労
攘夷鎖之而已ニ而ハ不悉天下之鋭気を相挫候ニ
深恐入奉存候是迄度々言上仕候通近年布告ニ相成加茂八幡
行幸御祈願被為在候程之儀且攘夷之儀
其為之殺人数千人及候次第ニ候ハヽ萬一
怨み随て内閧流離之者も亦恐入候之
何卒攘夷之
叡慮御貫徹相成天下之人心一和一致仕候様不堪至願候

御動揺之為　在々格別之御手当仕置先全不知実者之女言ハヽ
万民等一右ニ驚騒之ハ自然天下之士民九重之
深慮を窺ひ解体仕候ニ至候哉之趣
至尊之聖徳を奉感戴補相之賢徳之勤労
攘夷鎖之而已ニ而ハ不悉天下之鋭気を相挫候ニ
深恐入奉存候是迄度々言上仕候通近年布告ニ相成加茂八幡
行幸御祈願被為在候程之儀且攘夷之儀
其為之殺人数千人及候次第ニ候ハヽ萬一
怨み随て内閧流離之者も亦恐入候之
何卒攘夷之
叡慮御貫徹相成天下之人心一和一致仕候様不堪至願候

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

不整而已ず　神州挙而焦土と相成候も是非夷賊掃攘迄覚悟定候ハ必
叡慮毎日徹宵の御勘考の御模様又御發輝の為　莫多年々　御宿意を被為遂候
格仕度就而ハ海内之人心一定仕候格ニ御所置等ハ不相成候ハ第一朝
内之人心錯乱仕候ハ勿論其間隙ニ乗じて夷奴過去仕候ハ必然ニ候ハ先
速ニ申上候通三条家以下之人并長州父子ニ御所置甚以不容易御大事ニ候
ハ存候一旦錯乱仕候ハ迚も一致ニ期し不可至実ニ　神州ニ御大事ニ付何卒
御心を被為尽度存候三條以下七人并長州蒙　勅勘候儀其罪可有之候
得共攘夷ニ　叡慮遵奉苦心仕候ニ付既ニ掃攘ニ勉候ニ付候ニ儀若寛
大ニ御所置不相成候ハ攘夷ニ先鋒ニ候長州ニ　御厳罰を蒙候ニ付
術姑息ニ優ニ如ニ万人ニ存込天下ニ鋭気相挫可申ニ付家老ニ有之ニ於
ハ粗暴過激ニ振舞ニ有之ニ候ハ無疑竟父子攘夷没心仕候ニ
領内之人民相繋ニ奮励没死中ニも生ニ有之ニ候ハ粗暴ニ
不罪前文申上候次第ニ付去秋ニ始末矢張ニ
御差図ニ候ニ進退実ニ極ニ候ニ付候ニ
父子ハ恐入候ニも領内之人民痛憤難黙止歩ニ
ニ変動相起候ニも難計勿論及紛乱候ハ御取鎮ニ申ニ不容易且内地ハ素
ニ夷賊待受ニ候ニ付候ハ御取鎮ニ申ニ不容易且内地ハ素
ニ候ニ理ニ当ニ可申ニ候ニ付候ニ愛慮仕候ニ恐入候ニ
攘夷ニ一条ニ候ニ可相成ニ候ニ攘夷ニ候ニ事起候ニ却而攘夷ニ妨ニ相成候而已
ニ候ニ益　皇威ニ御衰微ニ可相成ニ候ニ間三条家以下
勝手ニ出奔ニ罪長州ニ満過激ニ科ニ候ニ一応御尋ニ候ニ而已ニ候ニ何ニ攘夷
先鋒ニ功ニ以寛大ニ御所置ニ相成三條家以下皆京長州入京ニ付免ニ

人心居合可申ゟ事ゟ右言上之緒必ゝ
ゝ仍芟実ゝ天下安危之機ゝ而存ゐゝ付難默止不顧不忖言上仕ゐ臣慶徳
前文之次第不幸病褥ゝ罷在上京難仕ゟ
御採納之上可然執
奏奉希ゐ恐惶頓首謹言 布 呈執事
正月十日
執事
慶徳

(三)甲子春或人ゟ探索ゟ玉中周旋話ゟ仁京師ゟ実事

一 朝政ゟ緑ゟ(ノマヽ)一件ゟ事ゟ一和ゟ後援ゟ為ゟ出来ゟ哥村松不
栗ゟ称ゟ共内ゟ入合ゟ於ゐゟ松ゐゟ
書翰ゟ内ゟ事ゟ以来ゟ如ゟ甚媚ゟ態ゟ
或ゟ中川宮守護ゟ有ゟ一同ゟ獄ゟ
附ゟ事ゟ掛ゟ事ゟ当ゟ甚無ゟ
ゟ右ゟ通ゟ仰ゟ居ゟ

松ゟ天保十三年
七月廿二日有 勅裁
勧修寺濟範
昨年十月他国密行
殊実妹義宮同伴ゟ
或師海宝僧正生涯御預
於東寺篤屋
吹方ナルヘシ

一 妻獄ゟ事ゟ田ゟ内ゟ通ゟ事ゟ五ゟ三ゟ
年ゟ内ゟ付ゟ事ゟ田ゟ同ゟ
ゟ事ゟ内ゟ通ゟ事ゟ
ゟ事ゟ内ゟ通ゟ事ゟ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

付ケ之ヲ万口ノ唱ヘニ和シテ名ヲ黒田山城ト改メ
ナニモ英嶽公不ノ字ヲ要ヒ玄ノ字ヲ称ス
ル法ナシ然ルニ之ヲ知ラズ玄ノ字ヲ称ス
ル者ハ悉ク山城ノ子孫ト思ヒ英嶽公ノ遺
ヲ忘レ玄ノ字ヲ称スル者ヲ悉ク追ヒ
ト云ヒ遂ニ内訌ニ及ヒ君ヲ引込ト申
一 宗悟公ノ御一家ニ限ラズ隠居老職ヲ初メ
一般ニ不和ニ
一 有馬公ヨリ談ジ込ミ候ニ付名知敲ヲ探索ノ
一 細川ヨリモ大藩ニ候ニ付厚ク待遇ノ
一 報酬ヲ家ニ伝ヘタリ
一 義祭論ニ付テハ世ヲ挙テ攻撃ス攻撃
ノ者亦一ト揆ヲ以テ防ク一揆ヲ以テ
防ク者亦一揆ヲ以テ遮ル実ニ
一 諸公ノ多忙ヲ極メ候ヨリ沙汰ヤミニ
ナリ候ヨリ益ス
一 水評判ヨロシカラス
一 閣老ヨリ度々御召ニ付出府ス
一 御心配ノ一端ヲ申上ル
一 長州ノ屋敷ヨリ水ヲ以テ論ズル事ハ不出来
一 御門ヨリ通用ヲ以テ一大事ト云ヒ
一 ノ事ヲ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

一 長防二ヶ国前探之儀左ニ申上候

一 防府岩国両所一条人気合之処大半一致之儀ニ候得共

一 周布兼中太田新事彼之義ニ付先達而両時ニ民穏ニ出精被申付候ニ付

一 旧臘中両辺意味合出張仕候ニ付而ハ其節岩国所ニ

我儘ニ付手書所存之所申述

一 去十二月中旬以来新造兵隊之儀ニ旧玉藩柳川漢介警衛ニ而度々辺迄

新造兵隊之儀ニ付申出来之方演述ニ而ハ兵士数十五字斗之内右九割

地下ニ而ハ岩国ニ而ハ多数ニ而ハ無之候

一 岩国ニ而ハ兵士ニ而ハ無之候ニ付義ニ而ハ志士ニ而ハ

ハ右之儀ニ付押而之内ニ而ハ

一 去十月上旬被為召上京之節下関ニ而実ニ通行ニ而ハ遠ニ而長州

扨又諸藩ニ而ハ切ニ縄ニ而ハ繋置候ニ而ハ

成丈ケ被為召連度ニ而ハ

一 防府岩国ニ而ハ向ニ而ハ遠国之義ニ付先ニ而ハ

合ニ而ハ有之候ニ付而ハ右ニ而ハ

一 長州ニ而ハ一条人気合之義ニ付八月以来ニ他所商人ニ引合ニ而ハ右ニ付住居ニ而

一 旧家中一体人気ニ而ハ中ニ而ハ

古ニ而ハ中ニ而ハ

一 同郡山口より家数千二百軒斗焼亡、内法
若狭七月廿日より守(文)代ろく詰越ル沙汰
一 同名家老毛利伊賀義去八月下旬より病気
一 同家老益田弥忠義去九月中旬より山口屋敷
ゟて二付城下へ引篭石戸屋敷ゟ守仕ル
一 同郡今市駅ニ去十月下旬ゟ完戸備前ゟ
大谷五拾人小筒多分指添ニ而人数差出
ゟ若ハ同所ゟお改ゟ押ニ而ゟ者を除ニ
一 七拾ゟ方差中山採分ニ付ゟ者ニ而ゟ
ゟ去十月上旬ゟ守備ニ而ゟ
ゟ去ル福ゟ者ハ山越ニ而ゟ
ゟ而ゟ

一 山口両ゟ城又ゟ屋敷ゟ石垣ゟ
居中ゟ又同所ゟ小郡ゟ
者ハ他ゟ中ゟ
一 浪浪ゟ儀ゟ
長州藩中下ノ関擾ノ節ゟ
ゟ唱ゟ結居ゟ
一 同州領一条俳個ゟ
多人数ゟ人数ゟ
市中ニ四人ゟ
ゟ有ゟ者ゟ
一 同州下ノ関ゟ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

五六町西摂の國に至又芸備を経て府大坂四十挺汽船
大阪字挺汽船日府清水日を経て所大阪九州挺長府に
山口日を所大阪十挺乗へみる中　徳山防州徳山九毛利淡路守四万石城下

一　往来書所る我を長府言書日久保市花器陶山右四ケ所に高府を所て有え
ら市に日加ケ府有ら安藤弥ら出張府勤ら仕来ら者多を
孚上西ら多弥若ヶ遠路しものを安用接候多境ら退戻しやお勺申ら

一　日お山口迄ら市ら一里斗小松畑ヶ家に柵つ土ら業立ら花ら挺居ろく所
ら所有之

一　長府侯ら迄我国ら客足ら守候主へお納ら点ら年限石ら下ら守ら貸付お多長ら処去七日
中旬ら右代官ら守石立ら多下ろくのの共送ら吸ら我ら竹ら二日加ケ府ら出
ろえろら守下ケおめ抔おろし叶家下ろれ下今ろ中

一　長府侯米穀相場お乱多ら仕ら立ろら仕お多侯城中ら移ら我お多ら
下の実市中ら迄府ケ領ら我ら事多ら吸弥山ケ加ケ府領ら仕ら
弥立迄ら抔去八月以来ら仕ら府ケ領ら我ら事多ら吸弥山ケ加ケ府領ら仕ら
味ら我ら多ら我ら去ら國中一体ら暗

一　萩ケ領主若多守上京有ら我ら事ら
一　是ら前田村ケ下の実ら迄ら話ら我ら事ら
去八月以来新ら前九ら前田村ら北山まと四下ら実ら迄ら話ら
お多ら叶ら数ら是右我ら前田村ら浦参場抔ら仕ら
一　是ら若多ら考ら掛引ら抔ら若長崎三ら剣ら多ら子叶ら吸ら
多仕ら居ら多ら考ら
一　萩城中ケ十里斗北西ら当ら吉田ら言ら三吉城抔ら仕ら
安芸ケ家一

松平近江守二万石
本家新田地屋敷有
山定府ニテナルヘシ

書山松平近江守陣屋出奔十月江戸引拂ニ而大田州高鴨ニ御下
東西ノ口々當府出奔ニ付申上ル
乍陸男ニ而御座候
右ニ通リ探索ニ付書付ヲ以申上

子正月

利三郎
安藤郎
正位
[illegible]

(五) 長州富居六卿之上書二章

臣等勅勘犯罪之身ヲ以國家之大政ヲ猥ニ奏上仕候ハ不憚
恐懼之至候得共攘夷ノ義ハ外夷緑虫之叛服相響キ内國脉ノ盛衰ニ相係候事故
臣子ノ情分難忍沈默敢而犯萬死鄙衷ヲ建白仕ル御外夷拒絶ニ奏去ル丑以
敷命不拘幕府之示令可布掃攘ノ旨御布告ニ相成ル所於關東鎖港談判ニ
取掛リ候應接中軽挙暴發等ノ様更ニ列藩ヘ
御所置有之ヘキ筈ノ處未タ御実効ヲ不ル為在如何ニヤト奉窺候
處當節大樹公ニモ御上洛列藩滿參昇國是一定膺懲ノ廟筭被為在筈ト恐察
仕ル得共万一ニモ期限御遷延ニ相成ル而ハ掃攘ノ機會ヲ失ル多在間敷積年之
敷慮御賢徹之時宜ニ人心ノ鬱ヲ不相ル之加之万民ノ疾苦ニ至リ邦内瓦解ニ
相成ル節ハ禍乱不可謂遂ニ夷賊ノ術中ニ陥リ拓古所無之大恥ヲ被為

受　神州糜爛ノ汚俗ト雖可想成ト泣血悲歎仕ル蒙昧愚陋ノ身天下ノ重
事ヲ奉議ル八多罪ノ至リ恐入ル共區々ノ情難默止冒瀆　天尊言上仕ル
不敬不悖ノ罪御許宥ヲ為垂寸志ノ段聖察不堪仰願ル死罪ノ誠恐
〻〻頓首謹言

其二

臣等分外之知遇ヲ蒙リ莫大之鴻恩ニ浴ル処去年八月十八日參内他出掌被止ル
処　勅命ニ違背脫走仕ル次第朝廷ノ御変事ヲ不顧
叡慮ノ御深旨ヲモ不奉宸國家多難被悩　宸襟ヲ祈柄於　闕下微忠
ハ相励可申之所不束之進退不悖　朝憲不敬之挙止其罪不輕
宸衷ノ程モ如何可為在ヤト恐縮仕ル於一同鉄鉞之誅ヲモ可蒙之所僅
ニ止官之段　仁恩厚キ不堪感泣ル自元攘夷ノ義ハ年来之
叡念ヲ為在ル処腐懲之事業難ヲ行　宸念貫徹不致ス多不堪慨歎悲憤ノ
至リ不顧自分外夷掃攘ヲ微忠聊奉慰
度志願ニル処却テ嫌疑ニ相纏奉對　朝廷懐ニ悪心風説ニ有之ル由鄙情實
徹不仕ル段不堪悲歎罷在ル前条之次第上京哀訴仕度存慮ニル共當節之
身分其恐レ不ヲ以書付奉申上ル仰願ハ聖明ヲ被為蚤ル様奉願ル死罪
〻〻頓首謹言

別紙先年の存一の処は熟成御実意を述ル条々書留ル上
ル而已ニ而御聞届無之候ハヽ重而申上候事と取了上

三條西　季知　五十七才
三條　実美　二十八才

正月

傳奏御中

右之通人々六卿之儀去二月廿七日上京二月六日御参朝之
旨宇也

東久世　通禧
壬生　基修（三十三文）
四條　隆謌（三十五文）
錦小路　頼徳（二十八文）

三條西前大納言　河村能登守
三條実美家来　丹羽出雲守

（二六）文久四年甲子春正月廿一日　御宸翰ヲ賜

於小御所大臣公卿方列席　大樹并列參諸大夫人ヲ召
尹宮御席中ニテ御拝戴一行ヲ御廻シ後　御先ヲ御由

嗚呼汝方今形勢如何ト顧ミン内則紀綱廃弛上下解體而蹉跌
若ム弥ヲ瓦解土崩ノ色ヲ顕シ外則驕虜五大洲ノ凌侮ヲ受ケ正ニ俟呑ノ
禍ヲ罹ラントス其危實ニ如累卵又如焼眉朕之ヲ思テ夜不能寐食不可咽
嗚呼朕身天地鬼神夫何トカ云ン何ヲ以テ祖宗（地下ニ）見ユル事ヲ得ンヤ由テ思ヘラ
ク汝ハ朕カ赤子朕汝ヲ愛スルヿ如子汝朕ヲ親ム事如父セヨ其親睦ノ厚薄
天下挽廻ノ成否ニ関係ス豈重ニ非スヤ嗚呼汝夙夜心ヲ盡シ天下人心ノ企望
ニ對答セヨ夫醜夷征征服ハ国家ノ大凶遂ニ雖懲ノ師ヲ興サスンハアル可
カラス蛍燭無謀ノ征夷ハ実ニ朕カ好ム所ニ非ス然ルエヒニノ策略ヲ議シテ以

テ朕ニ奏ヤヨ朕其可否ヲ論スル詳悉以テ一定不抜ノ國是ヲ定ムヘシ朕又思ラ
〃古ヨリ中興ノ大業ヲナサントスルヤ其人ヲ得スンハアル可カラス朕カ百武将ヲ見
ルニ皆ナ其人有ト雖モ當時會津中将越前中将伊達前侍從土佐侍從島
津少将等ノ如キハ頗ル忠実純厚思慮宏遠以テ国家ノ樞機ヲ仕スルニ
足ル朕是ヲ恃交スルヿ子ノ如シ汝亦是ヲ親ミ共ニ計レヨ嗚呼朕ヵ汝誓
テ衰運ヲ挽回シ上ハ 先皇ノ靈ニ報シ下ハ萬民ノ急ヲ救ハントス若
シ忘テ成功ナケレハ殊ニ是朕ト汝ノ罪也天地鬼神夫是ヲ極ムヘシ汝
勉強々々

二月廿日

三十四 忠寛 書簡

前文略 随々私義も今別条相勤候間貴意易思召下候段忝奉存候
付而ハ得ヒ何角ら心配仕候并仍事も追々座候ニ付不順ニ季候雨天勝別而一統難
儀不時ニ固ク候
御所ニも今ニ滞相成候哉ニ伺上候
陣仕候初 御条約ニも今ニ白米御手当相願是ハ関白様以上ニ御手当ニ
御条約ニ御手当ニ 召候ニ付御手当ニ相成候ニ而成程 御条約ニ
召ニ相違ニ而ハ不相成ニ付御転任不都合ニ存上候ニ 御首尾ニ而ニ百七十万石
都合ニ 還御ニ御模様ニ相成候様ニ祈念仕候ニ先ツ京地ハ穏ニ而ニ嶋津三郎ニ
も度々權少将ニ被 任節ニ登 城ニ 内々ニ而ニ内心ニ而ニ先関
東方ニ申事ニ而ニ座候 蔭嶺薩州ニ而ニ娘近衛様ニ御入輿ニ而ニ節御供女中ニ而

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

船長崎高松備守ニ相成右船用意ニ大坂ヨリ孫何百石積入差廻ニ付長州
沖夜ニ入着船ニ時長州ヨリ大砲打掛ケ候ニ付兼テ申合ニ通薩州ヨリ挑灯ヲ合図ニ
仕候ニ付一向ニ手向モ不致乗取候ニ付各申合漕寄ニ及ヒ一斉ニ打込六十人程乗組居候
人数悉ク討取右有薩州ヨリ早速寄護候ニ付無事ニ相成ト申事
公邊ニテモ兼テ置ヲ相待ト申長州ヨリハ異船ト見受候ニ付モ無相成ト申事
薩列ニ船ヲ入ルヽ等ニテ此度ノ所業ハ不和ヲ
ヲ以ノ事

一大坂ヘ　御入京ニ付淀小橋ヨリ御警衛ヲ以
昨出私宅ヘ見舞ニ参候申ト豊後侯
御後館裏ヨリ忍ヒ入候ニ付キ三ケ所ニ
ハ西城川ヨリ中ニ貴寓ヘ通ル八九丁ニ
ヲ以御人数ヲ指出差添ノ事

(六)塚孔二月二日手当

此節一橋様ヨリ兎角ノ風聞不宜ト相當節ニ
内実ヲ関東ヘ内々一所ニ一揆蜂起形勢相見ヘ
横濱ヘ入込ニ付迎ヒ人数ヲ向ケ候ニ付
速ニ切ノ様子ニ而板倉家人数ヲ向野戦同四五挺ニ而撃
ニ而死致候ニ付右ニ而先鉄静穏ニ成候ヨリ水戸領小川ニ造ヲ呼ニ水府義民ノ
中ニ三男ニ而交ヲ四五百人義兵ニ致候ニ付ヨリ是ヲ攘夷ニ期限ニ相待ト
ノ勢ヲ以ノ事

八ノ度ヨリ手ニ入ノ指出ヨリ私宅ヘ
ル訳合ニ而二日夜九ツ時ニ相成大雨ニ
合ヲ以来ル十七日御系ヒヲ以ノ施
ヲ以ノ通ニ又ニ入致ニ而ヨリ
ヲ以ノ事

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

ゟ惡事出（仕）不ル丁ト故先ゞ艾侯ゟ相成共ゟ上ゟ外上州下毛辺ゟもサゝヲキザシ有之ゟ
上方筋ゟ先ゟ仇穏成形ゟ少ゟ公田佩長州ゟ薩州ゟ船手掛ゟ則別紙ゟ通ゟ薩州
屋敷説ゟ金長州ゟ打出ス一弾丸ゟ槳ゟ打続ゟ數艘ゟ右ゟ場ゟ船衆ゟ
梅田市蔵印ゟ首ゟ江戸屋敷ゟ安用人ゟ来組相果ゟ薩州ゟ医師大野南就ゟ
人ゟ家ゟ下ト当京師内実国政島津三郎ゟ関係致ゟ三郎如何ゟ表
裏謀策多人物ゟ長州ゟ遺恨有ゟ説承ゟ歩後ゟ重如何
哉ゟ名賀辺ゟ有之ト

元 淀田氏清音 ゟ持筒頭 源大夫 手簡

去ル去年三月中近衛ゟ備場見分ゟ用ニ 仰付 晦日昼頃ゟ来即ゟ渡ゟ相成即日昼後出立
相模浦賀西東初猿島邊海陸上総竹ヶ岡廻り富津迄出洲隠ゟ洲左右
舟路ゟ前後相廻夫ゟ安房海岸房総境鋸山前後夫ゟ浦賀ゟ参ル
又ゟ旗山迄猿嶌ゟ一周ゟ一日泊ル夜調ゟ夫ゟ四月十
八日江戸着十九日登 城ゟ節御承知ゟ浦賀ゟ出帆返仰夫ゟ取調ゟ掛出来進達ゟ
後番ゟ面等迄出来ゟ共ゟ房艾後海陸御備ゟ用掛ゟ 仰渡御用多ゟ
本勤ゟ外ゟ掛ゟ故ゟ夜ゟ計相勤夜ゟ朝ゟ夕方迄ゟ掛ゟ用ゟ相勤夜ゟ朝四
半本勤ゟ方相勤ゟ外ゟ本丸二丸炎上其上 御玉洛ゟ 仰出同役七人ゟ内四
人右ゟ役ゟ 仰付少ゟ外同役三人江戸勤ゟ相成新規下ゟ不出来勤ゟ
仰付大ゟ三ゟ御門右ゟ家ゟ番相勤ゟ事ゟ相成ゟ番三人ゟ内一人ゟ父ゟ病
気

引込ム節斷押而出勤ル分十二月中旬ヨリ而來ル廿人ニて相勤ル事及二日續
泊リ又ハ引續相勤ル家 毎戸各ニ候十二月廿一日同廿三日二月朔日ヨリ四日迄
後更ニも立掛ル分ハ宅ニ而半日も參ニて廣新規植溜ハ屋敷下ニ而ニ
御免ニ相成大多三ノ口ハ當番計ニ相成夫ニ陽ハ人少ニ而ニ
所ニ而ハ一ノ家体出來ニて苗ニ二組頭ニ組頭ニ引續ニ而來ル廿
特ニ掌事引受ニ而ニ
月廿日ヨリ 御城ニ詰切當二月廿日迄ニ而ニ
多ク二而ニ又ハ
ニて 還御ニ而ニ
ニて哀ニ又ハ
ニて哀ニ而後ニ人ニ而ニ
ニみ不大方ニ而ニ
ろく ニ而ニ

(三)子二月廿日帝羽根梯死除新ヲ出ス 張紙ニ字

方今我國俸ヲ汚ス姦邪ヲ多シ鉞ヲ以テ衆ヲ率ヒ來ル者ハ先ヲ以テ之ヲ
改ス町人ニ三之ヲ出ス實ニ國ヲ賣ル賊神明鬼靈ニ不容大罪人ノ故ニ
我黨今度大ニ義旗ヲ擧テ攘夷ノ前ニ先ヲ國賊ヲ誅シ令被
天罰ヲ欲ス乞ヲ玉石ヲ碎ニ忍ヲ故ニ機ヲ
道ヲ侵伐ヲスルノ前ニ速ニ立去ル者ハ雖ヲ遠ヲ
避テ速ニ其死ヲ免ルヲあらン機ヲ

義旗ノ下

大田左近之助
毛利義人
芳城修理之助
大村益次郎

(三)
一、楠殿　御後見ヲ御取扱ヲ以来　御
奏聞ヲ以被　仰出候事ハ御次第ニ重キ事ニ
(三)
今般　当分様御改革和泉守父子ヲ始メ
仰渡ノ趣大要左ノ通ニ
二月廿日　吉岡ノ駅ニ於テ
(三)
於京地去月十二日稲葉長門守殿ヲ始
御役及違勅ノ儀ニ付テハ
仰出ノ趣左ノ通

御答御退治中二條

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

ら 仰付られ候事多き故 日光へ参り 仰付られ候事を 彼地にて承り候て 伝ゝ
申上候 以上

二月廿七

西尾隠岐守

三番 寄宿寺院 格之事 「西尾隠岐守」

吹上 上臈見系 菊大手三ツ 御門格 諸大夫 仰付られ候 「久世謙吉」

御多忙之処 久世謙吉儀も同様之 仰付 当申合一つ之事 相勤 且場所請渡
候 其外 後之御用 掛之 仰付候 一つ之事

八月廿四日 久世謙吉

吹上 同文 松平豊後守 江

田安

三五

松平家来磯貝猟之進儀 多忙之 仰付 候 分 八ツ半 後 被 教 諭 候 趣 承 致
他行 途中 夜 酒 食カ 哈 時刻 後 参 候 多忙 之 改 歩行 之 始末 不 埒 之 段 押 而 申 付
候 今九日 於 御 前 被 為 聞 御 後 宅 申 達 候 様 致 度 存 候 以上

二月 九日 井上河内守

三六

去月廿二日 御届申上候 松平山城守 江 戸 後 相 成 居 候 品 ゝ 宿 南 番 場 之 儀 番 人 差 出
置 通 行 之 者 改 相 通 可 申 右 之 外 八ツ 山 下 之 儀 ハ 非 常 之 節 非 常 之 人 数 出 候 心 得
南 番 場 之 儀 ハ 当 番 之 番 士 差 出 候 様 仕 度 候 尤 御 貝 附 候 ハ ゝ 山 伏 之 儀 ハ 秋

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

清水某ヲ召ス仰渡ノ次第申上ル以上

二月九日　九日ヨリ十四日迄出

三七

嶋津三郎儀先月十三日傳　奏野宮宰相中将ヲ以不容易御時節ニ付
朝議参預ノ者ヲ以　仰ニ依テ従四位下左近衛権ノ将推任叙ラ
宣下ノ旨別紙ニ写ヲ通ニ　勅許ノ右ヲ頒ノ通申上ラルル
二月十日　十日ヨリ別紙共ニ出　　勧修寺侍従殿　新納藤次

別紙

不容易ノ時節ニ付　朝議参預ノ者ヲ以
仰ニ依テ従四位下左近衛権ノ将推任叙ラ
宣下ノ事　二月

三八

嶋津三郎儀先月十七日　仰進ノ節先月十七日
参内拝　龍顔　天盃頂戴仕其節昨年七月鹿児嶋ヨリ英夷渡来ノ節
早速攘夷　神州ノ御威名不墜格別ヲ以テ尽力ヲ由ラ　聴食
テ御鞍置御馬壱匹　敵感不斜依
勅書ヲ以拝領被　仰付候理ニ付
未上京不仕在国ヲ以テ得ヲ厚　思食ヲ以裸裃御馬壱匹三郎名代ヲ拝領
仕　仰付又右同断ヲ以テ御紋ノ付
敵賞不斜依之判金拾枚　天賜ヲ以テ御紋ノ付
ヲ以又三郎名代ヲ以頂戴仕ル右ヲ頒ノ通申上ラルル仕ル

二月十日　勧修寺侍従殿　新納藤次

三九

去月九日傳　奏衆ヲ依御連署ヲ以上京麗ヲ下ル戸田大和守参参　内仕ル

神武天皇　御陵御普請御成功ニ付私義厚
宣下ヲ別紙ノ通ラ　仰度奉願難有仕合ヲ存ジ依テ御請ニ参如何相心得可
申哉旨御尋被遊度此段伺ノ以上

二月十四日　十四日ノ別紙ヲ以申聞ル

別紙

山陵御修補ニ義被建白ノ旨右御用一手ニ被
大和守家名ヲ連為致上京国々　御陵探索方格別骨折旦
四畑人家等ノ相成ル旨ノ義下民難儀不相成様申諭方行届都テ
朽ヲ為取計ノ旨既ニ昨午年。神武天皇　御陵御修補御成功ニ相成
朝廷　御追孝相立幕府誠忠ヲ親模後代ニ残リノ義稀成勤功被ラ
感賞候　仰出ラレ未御普請実ニ容易ニ非ス候
ニ依テ格別ノ御感賞可被

仰出ニ等シキ一ノ有ニ付

（三十）

私家族戸田大和守去月廿九日於京邸病死
神武天皇　御陵御普請御成功ニ付厚
勅命之上今般新ニ召出永ク
御陵守行ラ　仰付方ニ以テ御取扱ノ被成下以後年始御礼ニ及ニ節ニ拝
龍顔ヲ拝ラ　仰ニ付テハ別紙ノ通議　奏柳原中
納言殿ニ　仰渡ニ付テ御届申上候以上

二月十一日　戸田越前守

別紙

山陵御修補之義ニ付テハ前ニ為代去戌年以来
別段御手当　御陵備ニ付多年田畑人家ホ、相成居ル分ハ禁園ニ民居篤ト

戸田大和守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

武臣謹按遠武
載厥止代　山陵所
在域畏詳也孰謂
天朝隆盛之時
山陵芒無今
二千百餘年之間
云云不孝之又甚

申諭方行而就中　神武天皇　御陵之二千百余年洛無弥一之及廢絶
載厥止代　山陵所　在域畏詳也孰謂　朝廷　御進孝相之　等有誠忠之親族
天朝隆盛之時　御等を之御時節、至り
山陵芒無今　後代、残り山多之多、恐有脱カ　山陵得古　之
二千百餘年之間　敵感ふ斜り候ヲ　御感賞可有之処、未カ　洛等多信中ニ義ヲ存先ヲ殺新ニ
云云不孝之又甚　召出永く　山陵を行ら　仰付方石以上之列、洛有功ニ感下ニ後年始洛ニ孝
おゐ節を羽　龍顔ら称ら　仰付旦為
卒業之上告洛之等我一の看之事
(四)
攻馬并御馬共ニ係役ら　仰付ル
(五)
私多昨廿一日　公多様　御系　内ら称ル旨ニ而多
大和守ニ而連有て
戸田権大多

住ル以上　ニ月十ら日の状出
(四)
先月廿七日　御系　内ら遊ル分出羽守多ニ於施薬院　敵顔ル多申候ル洛ニ而
御感ら　上意御座ル系　以仕手拝　仰付ル
以上　ニ月十ら日ら
(五)
賞ら
一来十二ノ於天成殿　叙爵ら之ル
(四)
此度吹上　上覧系前大手三ノ門格勤ル事多
ル而系事ニ勤多ニ詰ル手系多殿ニ而多
二月十ル日

久世讃右
西ノ丸陪従

李文三士評定所
詰役勤定ある記錄

[illegible]
生野の亂ハ去ル年中春　御上洛供奉の者ニ被仰付
候ニ付其ニ振合ニ而ハ御留守の間ニ一つニ而も大手
三ノ口格ニ而ハ御留守ニ而ハ相成ニ付其ニ而ハ
右ニ而も御上洛ハ被為遊候間ニ付

㊂

去ル三日御勤定ニ而行都筑殿河原宅ニ而中山様ニ
畑善左衛門上條國左衛門ニ表ニ而取調ニ相成
當時申候者ニ付ニ而ハ一統同意ニ而ハ無之一統同意ニ
相成候三人同心ニ而ハ五人ニ而ハ勿論ニ候ニ付
此四名申上ル以上

二月八日　十ノ署ニ而

㊃

二月十六日

從四位下左近衛権少將三ノ郎俊
内ニ而
就顔　天盃頂戴御
城ニ而
城ニ而　御黒書院

㊄

六月廿六日迄ニ而
去月廿七日　御參內ニ而
御神祭ニ而
宣下有

神武天皇　御陵當節
五從一位ニ可有

御勅使
御勤仕ニ
御留守
御警衛ニ
御供ニ
御警衛ニ
御留守
御警衛ニ
御供ニ
御警衛ニ
御留守
御警衛ニ
御供ニ
御警衛

右之通被 仰付二條 御城ゟ 作出
之ル十日
皇度

一橋慶 御登見之義被 仰付候事 御軍営昇降之節
十八日 供 奏衆を以ゟ 作出
(完)

願之通五所ゟ三回之湯治被 仰付候ニ付

一万千百ヨリ鄭州薦野

土方鷲多代

(廿四)鳥丸丸太橋南陵宮高堤ゟ書

嶋津三郎儀不當之好計を抱 幕府を始
策略を工実以不顧 皇國傾敗不拘至了詐
徳川攘夷ニ而天下之加天誅者也

(廿五)二月十三日柳馬場四條上ル町寺町 松原上ル浄國寺高堤ゟ張貼写

嶋津三郎

其方儀種々好謀を以了國家ゟ天賊ゟ了其
一恐多も上 天朝を欺き奉り已ゟ長藩攻討ゟ
遅条
二表ゟ夷人ゟ手掃ゟ了上内ゟ交易被ゟ了条
一件赤銅銭茶油御物ゟ外色々

三 不忠之大名を同胞後天下之大乱之基を生る事

四 御国之為を考有志之者を駆逐する事

右罪状永銘考之者

土 筑紫

子二月

(三) 堺町御門北側桃園御殿際ニ大文字ニ認張置之

当時春嶽始尾張三卿等宮堂之後を張り 皇国を亡さんとす

もの数しれず一の悪之為に国を滅志之男雄大挙して不日に一切加誅

戮ものも

子二月十六日

(四) 二月十六日京都町奉行所配於宮家死罪 一云二月十九日去秋大和一揆之者共 於京都引回之上斬罪之名前ト

○土州之落士之話に尤之肩書有之ハ皆郷士之類之由諸士ハ等之と申す

土州 渋谷伊与作

尾崎太郎

安積五郎 (捨次)

中垣錬太郎 (鐘三)

出羽落之由 鶴田陶司

土州 あら あら

土州 土居佐之助

浮村幸吾 (七)

土州 赤岩俊之助

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

伴林六郎

辞世

武臣云本文忠云

(下思ふ 赤のやまの玉ぬきを) うらくへき
於ろのある身もろ矢の征矢(さきまうけ)を帯て都の花と散そ嬉しき

君か世の巌と共にうこきなくかくまき神津ろ浪 (一云伴林左京尹) 三捨次 多積立郎

咲うけて散や左木のかうら花 尾崎清子 (下林左京尹) 森後雄

(三)柳川屋吻主介尼通り伯有り中

(四)二月十日之内

昨年 御上洛以来被抽忠格別行届当今之御時節 御満足ニ被思召 御賞詞被下 尚以精勤可被尽旨ニ 仰付候

(五)御刀 加賀国 差添 代金三百枚

松平肥後守

山陵御修補ニ御用相勤ニ付

神武天皇御陵を始千家をはじめ御場所追々御修補御成功ニ付

勅使御奠宗ニ 御発輿深和矢 差添

一統ニ参ニ付 思召ニ依テ御刀拝領ニ 仰付

戸田越前守

名代 秋元但馬守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

御刀 白鞘 務の國弟分 仙台谷五枚

同文言

右於京都相廻

(廿七)二月十九日

神武天皇御陵御参詣御盛功ヲ以

宣下旨達 上洛ノ外 勅慮(ママ)従四位下ニ 作ル

右於御白書院孫嫡碁中列座備前守申渡ス事

戸田大和守

勅慮ヲ以従四位下ニ 作ル

戸田越前守

(廿八)日本貿易新聞 第四十五号 西暦一千八百六十四年第三月六日
我文久四年甲子二月九日 神奈川開板

京都新聞

爰ニ我等ノ信用スル新聞ヲ甚ダ緊要ナル者ヲ見テ今京都ニ於テ皇帝ト大君ト國家ノ重大事件ニ就キ会合ヲ設ケ談判アリ〳〵トアリ○是時薩ノ外五人ト我外國事務ノ役人トノ関係ノ事ニ就キ次ニ挙タル三頭ノ威権アル諸侯ヨリ彼ノ國ノ事情ヲ説キ示ス事ヲ務メタル○此時皇帝ニ向テ水府公ノ上ナル一橋候ハ専ラ鎖國ヲ説キ〳〵又大君ハ尾張候ハ開鎖ヲ就キ各説ナリト然ルニ是時薩ノ公ノ論ズルヲ才智アリト且膽略アル松平越前守トシテ議論セリ○上ヲ挙ル大諸侯ハ前章ニ謂ヘル如ク決定ヲルト雖ドモ聊カ非ラス彼諸侯ホノ欲スル趣意ハ我ホノ最モ能ク知ル所ナリ我ホ近頃日本國ヲ開盛ナル事ヲ就キ諸大君始メ人心ノ居合ヲ能ク得テ貿易ヲ盛ニセン事ヲ政府ヨ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

談判に及ぶまで今我ホの論ずる説と当今高貴の役人ホ日々會合を設け彼事件
を就き稽し議論我為に是に基きて越前侯既に稽し説決定ありと符合するに至る
りと然きとも当今日本人の知るる如く日本國は外國人援けを拠て是迄日本に開けさ
る諸品物を求る利益を得或諸大君より外國人に自ら對して小銃及び其附属の
械器且蒸氣船ホを需むるまで為て我ホ直ちに其器械を当國に持来るを拠て諸
大君始と是器の備るまで成ざるの日本人の性質も一般に新奇を好め
る者ゆえて甚事に對して移り易く日本政府ハ甚た権威なく且事に臨て恐
怖するのみならず今其國の事件を処置するの策略を設けて其改事を改正する
事を務免ること無きとも今日本政府ハ外國人貿易并懇親を破るの説を薩ト侯
并文智勝畧ある越前侯の取扱を拠て燒るに至るまで○憂ふ我ホ今猶一ツの
新聞を報告に薩ト侯ハ自己ホ生綸子包を当港に輸出せんまでを老中に乞ひ
求めんと我ホ近日其生綸の当港に輸出し来るを待のみ○此の如き薩ト侯
及び他の諸侯ホ当港ホ荷物を輸出し自己ホ貿易を為ん事を得ハえ来貿易の
主たる政府ハ益ゝ衰弱し諸侯ハ追々利を得て盛るに至べし○此頃天氣悪
しく雪降りて甚ゝ寒ゝと雖ゝ血ちホ消散ホて当港の市中ホ聊ゝ残る雪も
無きが如き天氣不暗るホ拠りて暫時貿易衰たる然ども再び少しく形
気残るに至るまん○当今江戸の騒説我
然きとも当港ホ於ける多くの日本商人ホ形勢穏ならざるホ依て全限の融通
悪しく是ん為ホ既ホ荷物を取集め当港を立退んとするものゆえ日本國人ハ
外國ゝの貿易我盛に成し且永続せしめん事を要ホと雖ゝ此事の行るゝを得
ざる事ホ当今を去暮ヨりハ少しく形勢を得るまん○然して去年中の貿易を我
ホ今考るホ政府の処置甚ゝ不定にして且外に種ゝの防(妨)け多しと雖ゝ当今ありハ少

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

く善と云○一昨年中当港に来る外国船の員数を茲に載す○貿易の為め
のみ当港に来る外国船八九十七隻其総計三万五千四百九十六頓あり又国産
入津する諸外商私百六十八隻其総計六万千二百六十頓ノ又国産当港より諸外
国船の員数を茲に載す○英私百隻其総計三万四千七百九十八頓○亜船四十隻其
総計二万千二百二頓○独逸船十三隻其総計三千四百六十四頓○普魯士私八隻其総計
二千三百一頓○仏郎西私七隻其総計二千七百五十六頓○普西亜船二隻其総計五百九十八
頓あり○ヒスパキセルレンシールー セル当今神奈川に来りて日本国の老中と会と為
さんことを要すアールヨツク君八日本人外ム人の能く知るが如く大勲功ある人国近頃ミ
シストル官より仕されたり○然れ共我ホ彼のアールコツク君の近頃江戸ホ発ち暫時其地ホ
在留さるの風説あると雖ホ其説まだ不明あれハ後ホ茲に記すべし

明治廿三年三月八日印刷
同廿三年三月廿八日発行

著作兼発行者　東京府平民　栗田信治寿
東京府平民　栗田信治寿
印刷者　東京府平民　栗田信治寿
印刷所　東京府平民　栗田信治寿
発行所　東京府平民　栗田信治寿

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

以降心志ある国人数名申合の上
帝国お為ニ下ニ心力を尽す可き事

二月

一 上田横浜ニ条可利ニ付ニ申合の上数名
同盟を以相互ニ不変ニ通ずる事

後ニ中ニ

帝国人名
仙台藩ニ属ス
五名ニ付ス

下野ニ属ス人名

(卒) 勤仕差害合永井房之助差出ス書付

松平鎮保頭

私知行之下総国通旗郡谷市場村外此仲
玄古十年以来西征ニ際候仕奥忠紀ニ
始撰夷ニ等ニ口実ニ多人数蜜ニ結集
第四条仕上総山之郡小宮村ニ振窟ニ
戸付呼度ニ吹ニ差加若ニ角ニ
若ニ差ニ新多ニ一同心配
西締出役ニ大名人数多ニ
備中ニ守ニ獨断ニ東京
二字ニ誤玄未村ニ達ス

合併為一冊子

㊂火消役大久保兵庫差出ス書付

昨十六日夕時比和泉橋中右衛門子ヨリ十四才ノ寅吉ト申者ヨリ
ノ門外松平豊前守大納言様ヨリ拝領辻番所ヨリ出火ノ知
ラセ有之ニ付早速駆付候処ニ右辻番所ヨリ小判ニ包ミ
有之候ヲ拾ヒ取候ニ付早速相改候処ニ右衛門子ヨリ
拾ヒ取候ニ相違無之ニ付早速右寅吉ヲ同人ヲ以テ全ク手
柄ノ者ニ付早速ニ差出ス様ニ申聞候ニ付早速ニ差出ス
和泉橋通ヨリ柳原通ヲ経神田川ヲ越シ浅草御蔵前ヲ通リ
又浅草ヨリ千住通ヲ経テ全ク保字小判ニ相違無之旨
前出ノ通リ証明等ニ取候ニ付十三枚ノ内ヨリ右ノ人ヲ以テ
所持候内ヨリ右同人ヲ以テ引渡シ候ニ付此段申届候
以上

二月廿日

大久保安兵衛

㊂

英国寺立

蒸気船 壱艘

但 長サ 二十四間 幅 三間余

帆柱 二本

右ハ私儀長崎ニ在留中御大納言様ニ御用ニ被仰付候ニ付
此度長崎ヨリ御国元江御廻送ニ付私儀モ御供仕候ニ付
名前書ヲ以テ御届申上候以上

私事

白地紺釘貫ヲ以御免申上

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

右之陸奥守殿へ
二月廿二日

(空)

一 此度之為御賞典五万石之
御加増被下置候
一 重嶽拝任御役中五万石宛
一 戸田大和守殿
陸奥守殿へ付 御叙位永く
御預ケ置候ニ付而被下候ものニ候
山陵奉行 御出仕
禁中ニ 御出仕

(六)

杉孫陸奥守殿へ被申蔦名右馬助同人
より左巻毛御馬被持来候間
為御見御厩へ御入置候
右之段申上候
二月廿二日

(五)

子二月廿二日 永乃名 為御賞
今度為長賊所逐乱 聯之過之君臣
ハ好入智ものと父子
ハ好入譲ものも身乃不為 聯之過之父と思へ 服し亦赤子と思也永ニ
心配ヤツレタニト思ノ外壮貌頼モシク思フセトテ敷行 御帰京

右之通先達之二条御成ニ付者之召仕者之召仕之
事ニ候間其心得之事

又
一周州侯親政荒尾但馬進向
此節以書面申越候長門宰相殿ゟ父子之死罪ニ有長門末家之人
吉川監物ゟ家老一人浪華ニ為召差登候旨 召之諸侯方ゟ
も死罪ニ有之ゟ在之中事ニ恐ゟ何ニ之意ニ有
哉世ニ之長人跡暴過激等ニ而退
即今 大樹公大小侯伯ゟ引率ニ而上洛中ニ付事ニ寄
ニ 御懸念ニ而ゟ御免ニ有之 天朝幕府ゟ有之ニ而ゟ
ニ於ニも暴発等之無様ニ而ゟ有之ニ付不肖ニ而ゟ
ニ有之 御代ニ京住仕居候ニ付 御供ニ而ゟ
此節懸ゟ厳重中ニ有之ニ付去年中長州藩家老根来上総井原主計前後ニ
浪華ニ伏見ニ而ゟ居候処之地ニ 京 御免ニ而ゟ在
厳ゟ行向ニ有之ニ付 朝廷ニ而ゟ被接候隙ニ上下
浪速ニ而ゟ 召ニ 京 ゟ之ニ而ゟ
召有之ニ付ニ而ゟ吉川監物ニ而ゟ姓名ニ而ゟ是又ニ而ゟ
ニ而ゟ去年八月十八日ニ而ゟ
利潤ニ而ゟ厳并ニ而ゟ 召ニ而ゟ
ニ而ゟ 天朝幕府ニ而ゟ
ニ而ゟ 天朝幕府ニ而ゟ
ニ而ゟ別紙ニ而ゟ一通ニ而ゟ
ニ而ゟ

○旧藩全人差出ス書面

此以書面ヲ以テ毛利長門ヲ義ニ付不肖ヲ以テ全人ヲ名代上京仕愚存ヲ述ル為建言仕ル且長藩人當地ニテ浪義近ヒ所長藩寛大ニ所置ヲ不加窺不堪痛心ヲ以テ嘗又愚存仕ル事ニ候ヘハ長藩ニ襲来ノ節ハ旁観難仕ニ付急帳ヲ以テ御報ヲ待ツ右ヲ以テ人頭ヲ海岸ニ出帆致シ候義ニ付此等ノ事ヲ以テ御届ケ申上候　神祭ヲ以テ謹言

帝亂罷在ル軍事杉梅ノ仕業ニテ不肖仕義ニ付

申十一月以上

二月十四日

㊅細川西公子建白

今般越中守ニ幕府ヨリ相渡ス封書之趣内閣老ヨリ内實ニ武門之實加越中守ヨリ勿論於両人ニ重日之次第ニ奉存候ニ付ケ熟〻長州之事体ヲ觀察仕ルニ近年洋夷乱航太平之久敷ト雖モ申求ニ任セ要津ヲ占メ開キ要地ヲ備ヘ候ヨリ義ニ至テ外ニ含ム夷狄ヲ忘ル所ニ候ヘハ諸邦之者悦歎憤怒ニ堪兼遂ニ櫻田西丸下之変事相生シ浮浪之徒虚ニ乗シ妄説ヲ唱ヒ其事堂上之諸卿及ヒ　公武之間殆ト四隔之姿ニ想成天下之人心次第ニ紛乱仕ル義ヲ大膳大夫深ク致慨嘆最初ヨリ為　皇國　公武之一和ヲ周旋仕ル誠意ニ相見ヘ不図今日之形勢ニ相成ル義ヲ以テ恐　公武双方之御所置ヲ不得已ル人心ヲ激諸卿ヲ過激之徒ニ推ル大膳大夫ヲ激烈之臣ニ推ル浮浪之過激ヲ推ル浮浪之過激ヲ相互ニ劾ヲ不得止展転相激シ一件之乱暴之仕方ニ及ル義ヲ奉存候ニ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

天朝ゟ大膳大夫非常之昇進ニ被　仰出其後暴戻之砌ニ
在うと奉恐察居ル処却而被賞剰ヘ監軍使をニ被差立一旦ハ九州之赴ニ
仕ル程ニ之座ル処其末八月十八日前後を以
御書達ニ而ニ長州一國疑惑解兼而冬ニ至り井原主計を以奉伺ニ通之筈ニ而此
節　公武ニ之体ニ而委任ニ為　在ニて将軍家ゟ直ニ被及沙汰ニ義如何程ニ之有之座
哉彼ゟを失張　天朝之重命を固守仕居十八日ニ後之義を却る　叡慮を矯ル義
も可有之座哉と心ニ之事体ニ而得ニ台命を奉ニ悔悟仕ル運ひニ至ニ候ニ兼一之了
奉存ニ而今般ニ而ニ勅命を以ニ御趣意を　勅命を以ニ宰相父子之内欲
又ニ大臣之内ニ而ニ大坂当り迄ニ　召寄ニ先般之軍使ニ対ニ仏之重ニ　勅使
ニて彼是ニ申ニ而ニ明白ニ而ニ諭ニ仕ニ為在此後此度ニ台命を奉ニ仏之旨を
上ニ而ニ迫之義ニ而ニ是非　天朝ゟ之所置ニ為在度ニ義ニ奉存ル右之筋ニ相成ル而
も還幸仕ル而ニ諸ニ天人之所誅ニ仕ニ　仰出ニ而ニ誰有ル否とも
存ル義ニ有之座間敷ニ左ニ之座ニ而ニ大膳大夫初二三之大臣十八日後之　叡慮を
奉ニ仏之心願ニ之座ニ而ニ一國中を示諭仕ル義何ニ為ニ乎ニ及ニ不了不本意ニ而ニ
戦争之場ニ而ニ至ニ而ニ其響ニ如何ニ為ニ乎ニ難計洋夷覬覦之折
柄実ニ　皇國之安危ニ係ニ可申深ク奉恐念ニ而ニ　朝廷ニ在大体之義ニ被相済
ル上将軍家ニ一切引請七卿之面々ニ勝手ニ國許ニ連帰ル義ニ付ニ而ニ是ニ之幕吏暗
殺并ニ薩州之軍艦ニ暴発ニ之事件ニ而ニ面々ニ及ニ諭ル義ニ而ニ究ニ暴臣浮浪ニ之仕業
ニ於ニ大膳大夫ニ奉恐入積日を以ニ断ニ止ル而ニ可有之座ル其経ニ而ニ応相有之ニ懲
戒之座ル義順路之ニ運ニ而ニ居ル事柄ニ而ニ速ニ及ニ着一ニ奉存ニ候ニ得共右之ニ所置次第
不容易儀ニ而ニ成行ニ可申甚以ニ恐労仕ル世ニ非常之奉ニ蒙　御懇命ニ而ニ私
共ニ而ニ奉恐入ニ而ニ御請ニ申上ル而ニ已ニ而ニ不顧万死ニ奉申

上ノ誠恐誠惶頓首謹言

甲子二月

長岡隆之助

長岡良之助

私ニモ此建白ノ事ヲ不相成由且蟄居ヲ禁足ヲ御覚ト不入由リ取沙汰有之ヲ右ニ付両公子ヨリ被国ヲ由且諸家ヨリ建白モ有之ヲ乱ル建白事情ニ切当之由ニテ京都之評判モ宜ク聞ユ

(六七)

高鍋侯建言

中川宮兼而

皇國之爲御尽力被遊、昨年八月十八日前後ヲ格別ニ御勉力有御一生之内二千俵ヲ、社禄ヲ御修復御名義ヲ何ヲ奉存ル一庶天下ヲ天子ヲ天下ヲ幕府之天下ニ等シク鈍而

皇國ヲ御爲ニ成ル事ヲ何レ天下ヲ私セス主ル様相窺右ヲ御受ケ成ル様相窺候是双方不都合ニ候ト奉存ル八月十八日一件ヲ後而

天朝ヨリ行合ヲ既ニ

勅使ヲ御差立御攻着ニ相成ル得ヲ右ニ嘗テ迄モ失張

王朝ヲ出不

申ヲ御鈎合悪シ〳〵可有之ト奉存ル會津其外ハ幕府ヨリ御賞ヲ被成ル得ヲ此ハ臣下ヲ事ニヲ賞上方ハ其比後ニ相成申間敷ト奉存ル就テハ

天朝ヘ

幕府ヲ何程ヲ申ル物御貢献相成夫ヲ勲労之方ヘ御賞ヲ有之ル得ヲ名

義正敷至當ニ御所置ニ存ル此事御誤有之候而御尊王ニ御痛
障リ草莽ニ而議論ヲ生シ可申而御熟考ニ止御採用有之候事候
二月

(六) 二月廿四日筑前甲子上書

御國是之義ニ付長州御所置振寛大ノ御意無之候而ハ速ニ
策ヲ重大ニ事件輕卒ニ難申上ヲ得ス長州ハ所置ニ差別ヲ付急ニハ事柄ニ
隠察ヲ而愚意ニ頗不避斧鉞吐露仕ル根元同所ハ勤　王攘夷ニ厚志ヲ奮發仕
ル者ニ而幕府ヲ致輕蔑別ニ昨年以来ニ挙動御
咎ニハ得ト論ニ類ニ說激ニ論ヲ相立幕府ヲ
域光ニ相抱リル有志御糺問ニ上致　拒ル於テハ六師征討可為ヲ相當ニ
の論ニ追ニ承ルヘシニ萬ニ勘考仕ル處方今海宇ニ人心未及一定漸々近来
ニ至リ　公武御和合水魚ニ御親ニ被遊ル御手初ニ外夷ニ驕擾ニ難討
ヲ屋ト称柄社稷ニ而ハ同州ハ申ニ不及諸藩共人心沸騰
仕或ハ不逞ニ徒庶民ヲ致煽揺
皇國争乱ニ端ヲ相成可申ト深ク焦愚仕ル處其上項日諸藩ヨリ幕府ヘ
封書被相渡ル内ニ有之ハ長州ハ征討ニ及ヒ一統ヘ流布仕急同州ヘ相響キ可申処
ル時ハ一應の御糺ニ無之直ニ御征討ニ相心得詭激ニ情態致増長終ニ
正議ヲ臣ニ不堪ニ懐過激ニ徒ニ黨與仕國之存亡ヲ不顧必死ニ覚
悟ニ籠城可仕勢ニ至リ可申ト勘考仕ル就右先一應末家ニ老臣ニ内
早々被召登
勅使幕使ヲ以是迄ニ心得御訊問ニ上理非分明ニ方今ニ御
趣意ヲ以御懇説ニ相成猶大膳大夫父子申合速ニ御請申ル様ニ
悔悟ニ微塵ニ過激ノ輩ヲ奉謝ニ於テハ出格の御憐愍ヲ以社稷ニ別條ニ
典ニ相成ル様御上策ニ存ル一侍ニ

叡慮遵奉し昨年異艦掃攘之魁仕奉し
叡感被　仰出監察使をも被指下旦去五月十日攘夷の期限之被
仰出も者　如懐と存今以八月十八日以前之
叡慮とのミ存込罷在之向幕府ゟ何程懇説いたし過激之事承服仕罷成候哉之旨
此節之御所置も　勅命を以ゟ　仰出之方可無愚考仕之右之通ニ而者結局奉恐入候而も悔
悟改悛を對　勅の罪難遁之ゟ御征討ゟ　仰出ニ而も可無哉ニ付得と相成丈ハ悔悟之御風諭
ゟ　仰付度事ニ候ニ付御下問ニ付尊卑熟考も不仕粗漏ニ申上候段恐入奉
拾當下候ニ付再三熟考之上申上候ニ付可然御宣敷
誠惶誠恐頓首〻〻

二月廿三日

松平下野守
慶永　賛

（朱）文坂別状　四月廿日語某所送

薩人（薩州家来）大谷仲之進

右之者去冬泉州堺ゟ長崎ニ運送之節英夷ゟ交易之名積下ニ付逐一之及白状豈
度於防州（別府）刻浦厳重之及糺明ニ慶外夷ニ交易之被傷天下之人心奮起之候ニ付之
計薩公之満願聖以来尊攘之大義ニ被倡（一被脱）候ニ付之
今ニ至ル先公之　仰旨を忘却し外夷ニ令交易之ニ付全論役人貪欲を耽私計之而
上ハ十余年来日夜宸襟ニ懸ル幕府之怠惰ニ付之
神州之国力ニ疲弊
拂底物價高直ニ相成人民次第ニ困窮ニ相迫リ候ニ付之
きめ外夷狼ニ而ハ之き夷賊之術ニ陥ル至
神州有限品ヲ以夷賊ニ貪献欲況
せんとニ其罪天地ニ不可容（神人共ニ怒ル所ニ候）因之其品焼拂船中居合之好吏ニ誅ニ世間交易
する者を戒しめんため如此梟首ニ処する者也

子二月廿六日　五

順聖前薩侯
齊彬朝臣之謚也

雨風不蔽ともよし桜花君ありて
大君の皇座乃山の桜花八重も九重も
我亦両人存所有ん国許被脱是ん君山
ん所相前山有碍ん加詩戯ん全是ん交易す
ん敵慮相一劫貫度割腹ん我等盡赤心天地神明恐誤ん
謹ん祈者也

二月廿六日朝七ツ半時東御堂御門前ん
外ん
二月廿二日朝六ツ半時過頃瑤大和橋ん首有
吐道ん傍ん深川通行物屋ん与兵衛ん
中国浪士
水井精一
山本誠一郎

(十七)

大目付ん

去ル十五日於二條御城ん手恥後守事軍事御義ん
御免ん付ん手春嶽ん手都守護職ん
御愛ん以ん上ん大蔵ん補ん改名ん
(十二)在京某氏手柬

昨廿四日御出仕ん中ん御ニノ丸ん半時相ん申ん於ん
勅書ん御趣意ん御長文ん候得ん詳ん
禁襟ん御不徳ん至ん
御与ん御引請ん重文
御落ん御筆法ん御改ん

一 酒井左衛門尉殿和泉守殿御連名を以面通状到来
以通状得告候昨日拙者儀 営私
之儀後席に於て乍申列座御免蒙ら
勅答奏 御使之儀大目付神保伊予守
殿御使に被遣候儀と存候
二月廿五日
御名
御五事四連名

於又御使之儀大目付同人に御勤之儀序上台一
統一和解の上 月番之老中より御使者御口上

右之通被仰渡候ニ付而ハ 御勅答之趣ハ
下之人民苦しみ候ハ 御聖徳を慕ひ奉り
彼是申立候儀ニ而ハ 畏多き天下之武備を充実ニ
被遊候御事を退ケ候様ニ取成候儀ニ而ハ
右之通之 御勅答 御受仕り
右を訳ケ申急と攘夷之儀ニ付先達而
之攘夷と申訳ニ而ハ 御勅答ニ相成候儀ニ付
先ハ右之通り 御採用之格別御丁寧之
御事と存候の旨ニ而 官位職ニ付ての
儀ハ 御勅答之趣ニ而ハ 御受難仕
先ハ 御断申上候様との事ニ付
三月廿四日 酒井左衛門尉

去月廿七日　御条　㊞在京万石以上ノ面々ヘモ被仰出候事　㊞ら
御勘考　御勘見方石以上ノ面々ヘモ可見計　仰付
候ヘ共十四日　御条　内々ニ而御練方
宸翰写差　御下ケ被遊候ニ付
二月

宸翰写

太奉書抓撰

朕不肖ノ身ヲ以叨ニ天位ヲ践ミ黎モ萬世無欽ノ金甌ヲ受
ケ恒ニ寡徳ノ
先皇ト百姓トニ背ニヿヲ恐ル就中嘉永六年以来洋夷頻ニ猖獗
港ヲ國體殆ト云ヘカラス又諸價沸騰シ生民塗炭ニ困ム天地鬼神
夫朕ヲ何トカ云ン嗚呼是誰ノ過ソヤ風夜是ヲ思テ止ム能ハス
嘗テ列卿武将ト是ヲ議セシム如何セン昇平二百有餘年威
武ノ以テ外寇ヲ制壓スルニ足ラサルヿヲ若シ安ニ膺懲ノ典ヲ
擧ントセハ却テ國家不測ノ禍ニ陥ルヿヲ恐ル幕府断然朕カ
意ヲ擴充シ十餘世ノ因襲ヲ改メ外ニハ諸大名ノ参勤ヲ弛メ
妻子ヲ國ニ帰シ各藩ニ武備充実ノ令ヲ傳ヘ内ニハ諸役ノ冗員
ヲ省キ入費ヲ減シ大ニ砲艦ノ備ヲ設ケ実ニ是朕カ幸ノミニ非ス

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

宗廟生民ノ幸也一旦去春上洛ノ慶典ヲ再興セシ[1]ム嘉賞スヘシ宜科ラン[2]ヤ藤原宇[3]美等鄙野ノ匹夫ノ暴説ヲ信用シ守内ノ形勢ヲ察セス國家ノ危殆ヲ思ハス朕カ命ヲ矯テ狂辛ニ攘夷ノ令ヲ布告シ妄ニ討幕ノ師ヲ興サントシ長門宰相ノ暴臣ノ如キ其主ヲ愚弄シ故ナキニ夷船ヲ砲撃シ幕使ヲ暗殺シ私ニ実美等ヲ本國ニ誘引ス此ロキ狂暴ノ輩必罰セスンハアル可ラス然リト雖皆是朕カ不徳ノ致ス處ニシテ実ニ悔懲ニ堪ス朕又方モヘラク我ノ所謂砲艦ハ彼カ所謂砲艦ニ比スレハ未タ慢夷ノ膽ヲ呑ニ足ラス國域ヲ海外ニ顯スニ足ラス却テ洋夷ノ軽侮ヲ受ニ依故ニ頻ニ願フ入テハ天下ノ全力ヲ以テ摂海ノ要津ニ備ヘ上ハ山陵ヲ安ンし奉リ下ハ生民ヲ保チ又列藩ノ力ヲ以各其要港ニ備ヘ出テハ數艘ノ軍艦ヲ整ヘ無銭ノ醜夷ヲ征討シ先皇膺懲ノ典ヲ大ニセヨ夫去年ハ将軍久シク在京シ今春モ亦上洛セリ諸大名モ亦東西ニ奔走シ或ハ妻子ヲ其國ニ帰ラシム宜ナリ貢用ノ武備ニ及ハサルヿ今ヨリハ沢ニテ然ル可ラス勉テ太平因循ノ雑貢ヲ減省シカヲ同フシ心ヲ專ニシ征討ノ備ヲ精鋭ニシ武臣ノ職掌ヲ盡シ永ノ家名ヲ辱ルヿ勿レ嗚呼汝将軍及各國ノ大小名皆朕カ赤子也今ノ天下ノ事朕ト共ニ一新セントヲ欲ス民ノ財ヲ耗スヿ無ク姑息ノ奢ヲ為スヿ無ク膺懲ノ備ヲ嚴ニシ祖先ノ家業ヲ盡セヨ若怠惰セハ特ニ朕カ意ニ背クノミ非ス皇神ノ霊ニ叛ルヿ也祖先ノ心ニ違フ也天地鬼神モ亦汝等ヲ何トカ云ンヤ

文久四年甲子春正月

大奉書折一冊

御請写

去月二十七日拝見被
仰付候
宸翰之
叡旨者
御即位以来
皇國之災禍ヲ悉ク
聖躬之
御上ニ
御反求
被為在候
勅諭ニテ誠以恐惶感泣之至奉存候倩幕府従前之過失ヲ
自反仕候得者多罪之至奉存候臣家茂不肖之身ヲ以徒ニ重
任ヲ辱メ紀綱不振内外之禍乱相踵頻ニ奉悩
宸襟候而已ナラス去春上洛之節攘夷
勅ヲ奉スト雖モ其事實遂ニ難被行横濱鎖港之談判スラ
未タ成功之期限モ難量旁柄再
命ニ依テ上洛仕候上者極メテ逆鱗ニ觸レ嚴譴ヲ可相蒙者素ヨリ覺
悟仕候處意外之

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

宸賞ヲ奉蒙候而已ナラス至仁之
恩諭ヲ以臣家茂幷大小名ヲ赤子ノ如ク
御親愛將来ヲ
御勸誡被為在候條臣家茂一身之上ニ取海嶽之
鴻恩實以可奉報答様モ無之候自今以後萬事之旧弊ヲ改メ諸侯
ト兄弟之思ヲ盡シ協心力ヲ合セ臣子之道ヲ盡シ勉大平困備之宂費ヲ
省キ武備ヲ嚴ニシ内政ヲ整ヘ生民ヲ蘇息致シ擇海防衛者勿
論諸國兵備ヲ充実仕洋夷之輕侮ヲ絶チ砲艦ヲ嚴整ニテ遂ニ
膺懲之大典ヲ奥起イタシ御國威ヲ海外ニ輝耀スヘキノ條件
等弥以勉励仕候
宸襄ヲ奉休戚度奉存候事ニ御座候仍條膺懲妄撃仕問敷

ノ

叡慮之趣ハ堅ク遵奉仕必勝之大策相立候様可仕奉存候尤横濱鎖
港之儀者既ニ外国江モ使節差出候儀ニ御座候得者何分ニモ成
功仕度奉存候得共夷情モ難測候得者沿海之武備ニ於テハ
益以奮發勉励仕武臣之職掌固守仕大計大議者悉ク國是
ヲ定メ
宸断ヲ奉仰
皇國之衰運ヲ挽回シテ外ハ慢夷之謄ヲ呑
奉安
叡慮上ハ
皇神之靈ニ報ヒ奉リ下ハ祖先之遺志ヲ継述仕度奉存候是

壬炅ヲ保テ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

則臣家茂之至誠懇禱ニ御座候依之此段御請奉申上候

臣家茂誠恐誠惶頓首謹言

御請

臣家茂

帝国大学蔵書

㊂嶋津大隅守建言并評

皇域御振興生民塗炭ヲ苦ヲ救度との從来ヨリ

敵慮ヲ存在候ニ付テハ宸襟ヲ安ンシ奉ル為メ速ニ

可ラク存候旨ヲ論ス議ヲ以テ自ラ護衛ニ

評如此　敵慮ヲ以テ奉伺英夷ト一戰ヲ辭易シ

天朝ヲ不奉伺幕府ヲ備金ヲ私親ヲ取結ヒ加之横濱ヲ長崎ヲ薩人ト夷賊ト會合

菅野某十餘万金ヲ糸ヲ買ノ

改ノ亞船ヲ新水食糧ヲ與ヘ丁寧ヲ取扱ヒ事又京攝其外大

和河内ヲ綿油水錢ヲ買ノ所業ヲ何ヲ前件ヲ

敵慮ヲ奉ノ生民塗炭ヲ苦ヲ可救哉

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

今攝海を御ふも當向觀察仕ひ彼ヶ炮艦ニ可對應炮臺之
要陸上ニ野戰を可營ニ備多ニ我何を以勝算可有之哉多人ニ地同然
ニ建言　禁闕ニ保護京畿ニ敬言衛多遣見ニ事ニ後ニ各國ニ兵備
ハ各國ニ量見ニ可有ニ非ニ得ニ何ニ攝海ニ要港ハ
皇國ニ全力を以彼ヶ炮艦ニ可對應海陸ニ備を嚴ニ内外見ニ此度
相定速ニ　叡慮を以ニ立ひ給ふニ度義とニ存候
評攝海ハ自當ニ儀ハ既ニ昨癸亥年迄ニ始ニ御着眼有之炮臺
追ニ築造殊地形を熟ニ察スルニ紀州加田浦淡州岩屋兵庫其外
諸海岸佐賀馬関ホ諸ニ滿ニ持場ニ可當ニ得ハ攝海ニ要
所を申ニ及且攘夷ハ不ニ宜ニ儀ハ　天孫ニ而ハ申分ニ無多ニ
天子御勉ハ不心ニ安遊ひ候儀ニ
皇國中大ニ奮起ニ非ニ鬪死を
願ニ者數百万人可有ニ之ひ時ニ防禦自ニ成就可致ニ候儀ニ
攝海の　皇國ニ全力を以ニ彼ヶ炮艦ニ可對應海陸ニ備
を嚴ニ守ニ六ヶ敷言ニ付其底意ニ虛喝を以ニ人心を疑
惑セシメ攘夷ニ念を薄ニ仕候ニ而ハ却而ニ高論ニ引
入んとの奸謀ニ被存ひ
既ニ追年諸國ニて多謀ニて攘夷相唱ひ頻ニ内備ニ議論有ニ十年ニ星霜を
經ニても其驗不相見ひ有之
夫ニ引ニて始終ニ遠略ニ不渉一己ニ管見を以揆撥切齒ニ
志ニ於ニては一ニ不可悪訳ニも相當可申候
評攘夷ニ云ニ固ニ引ニ國体ニ立不ニ引ニ起ニ候ニて大平之人心弥固備ニ
有ニ之其驗不見ニ全ニ議論のニ

実地の戦争等之敗且又亜夫之ごとくナト、喙りゆるを有志之中
ニハ汝ニ勝ル卓見ハ餘多有之一心一己ノ管見トハ却テ汝ごとる
ハル功苗抔晩致ルハ志ニ於テハ不可忘訳ニモ相當リ可申歟トハ何事
ぞ亜夫ナレハ捨身報國之赤心天地ニ不恥大正氣ハ奸賊之眼ニテハ却テ
悪党相見ニ己ガ識量ノ不足ヲ自ラ吐呪スルノ文面又恥シラズも
有條ハ國体ヲ立不立攘夷ヲ成不成ノ利害得失ヲ熟考仕候ハバ
誠以不可謂 皇國之御大事ナる事理判然たる訳ニハ參ノ堂々たる
朝廷ヲ幕府天下之大義ヲ被次一昨ヲ物議(以上ルビ 悦話アーソン)ニ拘泥不成、攘夷ヲ被斷ヲ
不思寄ニ後ニ在之候旦後世ニ對シ臣子之義ニ不相當ル候意ニテ
ゑ難相立ハ尚更非真ニ攘夷ヲ被行盟天地奉安 宸襟ハ被
ゑ難相立ハ尚更非真ニ攘夷ヲ被行盟天地奉安 宸襟ハ被
ゑ先以彼ヲ制壓ヲ被ヘきの武備充実致ハ義急務ニ有之座ハ
尚ほ多始神速ニ京摂ハ勿論向盛大嚴重ニ被設度事ニ候得共実以
不容易訳ハ勿論ニ候
許去年攘夷ハ変定期限ヲ以被仰出幕府奉致居ル時ニ
至リ持論ヲ変シ今日ニ當リ工ニヨ此言ヲ吐ハ
し奉リ幕府ヲ欺キ人心ヲ狐惑せしむるの甚敷ヲ又矢張開
港ニ引合の依頼ト察ハ臣子ニ於テハ
て已義ニ復セヨ

於幕府勤 王ニ御至誠被尽度旨ハ
日ハ一刻假令暴論ノ輩と雖とも感泣仕候程の実論不相顕ハ天下之
人心ニ服合ハ勿論 皇國挽回ニ道和之儀 宸襟ハ時ハ忽
朝廷の御體裁ヲ乏ニハ義ハ勿論ニて第一ニハ幕府ヲ御職掌ヲ乏盡

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

厚薄　治亂興廢ノ機相乗ジ可申ハ固ヨリ根本タル武備充実ノ大業速ニ不容緩ヲ以テハ不相解訳筋々ハ鑒察被為在候
詳ハ文丈ケニ略ス外ニ擾夷ヲ唱因ニ交易ヲ営ム身ヲ以テ幕府ニ對シ如此異見ヶ間敷大言ヲ吐ハ大奸謀ノ本心ヲ隠ス為ニ
ナルベシ
扨去ル午七月幣邑ニテ英夷ヲ一戦ノ砲艦ノ備ヘ手薄ニ故ヲ以僅ニ撃退ニ堪ニ至ルト雖モ一勝ヲモ幸ニ彼ノ伎倆ヲ克ク実察ノ処我ニ遺憾武門ニ瑕瑾ヲ恐入ル候
十分ニ武備ヲ神州ヲ氣節ヲ數十年ヲ保チ度ハ神州ヲ氣節ヲ數十年ヲ保チ度ハ神州ヲ氣節ヲ數十年ヲ保チ度ハ

候敬白

子二月

嶋津大隅守

許右ヲ愚意愚文愚建白ヲ都ル一体ヲ文面一々句ヲナス抔ト愚
文ノ甚タ之人気ヲ紊惑セシムルヲ恐ル而已ナラス全文ヲ攻来ラン愚眼ニテ
幕府ニ対シ不當ヲ過言ヲ弄シ不忠ヲ暫ク俗人ヲ見ヲ眩シ已ヲ進ンテ化ケノ翼ヲ掩ンテ幕
府ノ異見ヲ杜絶スルノ言ヲトイヘトモ子ヲ見ル阿諛ノ私心ヲ免レ
サル具眼ノ人ニハ明ヲ了ニ終ニ井伊安藤ノ天下ヲ欺ク好計ニ同シ向後
恥ヲ紹テ改心シ五一天地ノ冥罰ヲ逃ンコトヲ願ハ言行一致ノ人ト相ナ
皇國ノ為ヲ思慮セヨ

(西)子二月廿二日三條大橋西詰西側塀ヘ張紙写

一 近頃ニ至リ却テ懐夷ヲ説ク輩アリ 叡慮ヲ煩ハス條
天朝中ハ列祖ノ遺訓ヲ守リ下ハ蔓国ヲ人民ヲ撫育シ好吏ヲ撰ミ 叡慮ヲ煩ハス條
神人共ニ楽ミ天変地妖手傷ノ外中興ノ春日神鏡ヲ砂刻モ忘レス従古未曾有ノ
好基ニ処リ人ヲ改過ノ後ヲ却テ魂夷ニ迎ヘ奉ラント暗弱ニよるといくとも
至極セルノ謀ヲ廻ラシ 叡慮ヲ暗弱ニよるといくとも
列公ヲ送命ヲ企ラルヽ 皇國ヲ得止ノ為ノ後悔ノ事
一 去ル子年九月廿四日横濱鎖港ヲ許判ヲ乱 談
於幕府ニ相成数万金ヲ償ヲ以横濱一港鎖閉ヲ後ヲ相唱ル条々実ニ夷ヲ
好ムノ至ニ非スヤ 魂夷ヲ一言ニ畏縮シ及因循ノ
一 三忠ヲ長州ヲ好謀ヲ以遠ケ奉ル者全ク幕府ノ好謀ニ非スヤ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

一 宸襄を仰ぐべき旨を論ずる第二也

一 長藩之俊傑深察 叡感之厚多くも矯
いて共一日も藩論を正論に挫々まり如此度枚元但馬等於長州ニ
朝命を拒ぐ限之論ずる第三也

一 討長之策ハ薩之藩ニ建言ニて解終ニも長門国を
過長国を劫掠しめせ後ニも薩をも同様
ニ仕向之論ずる第四也

一 大和国浪士国獄ニ者を外夷ニ勢力ニ一駁之ため共ニ挙兵ニ
之ため彼等を小ニ至ニ迄助命建言者ニ而如斯之
ニ而ハ不堪痛憤院ニ 戊午参後勤 王ニ有志家於那命ニ殺ニ
上下ニ不堪痛憤院ニ 戊午参後勤 王ニ有志家於那命ニ殺ニ
可論ニ罪五也

一 當今ニ形勢ニ而ハ宸襄を以 幕威を挽回
格ニ好曲改革職ニ無煩迷ハ 神明ニ覚無之
列幕威を凌ニ而ハ不可ニ而ハ幕吏ニ而ハ
理をおゐ外夷掃攘ニ而ハ不可ニ而ハ国家ニ而ハ
論ずる第五也

一 薩藩ニ因循家落ニ而ハ国家ニ而ハ
戦争ニ而ハ相手ニ而ハ交易ニ而ハ
ニ而ハ一ニ而ハ 叡慮ニ合

文久四子年二月

○甲子春自京師令達朝

昨年八月廿八日先鋒を国事掛堂上を或は鎮撫或は
勅使を奉し一大一変改一今迄之議論を実行之場と
変じ和親を　叡慮を以て相成丈け公武御一和之
子孫世々を辻切物有之候多く有之候彼中川宮を八月廿八日以来八日被幽下二一変改
一ツ橋を始め諸
侯皆々　叡慮を奉し一幕府を御委任被遊候旨
を皆山師を実会之名に変化仕候を以て長州暴発頃十七年已来之
詳不建白し公卿之間に周旋奔走候末又
朝命を奉し一幕府を御委任被遊候旨を
御

速更、おゐて、女兵僧兵農兵、とゝを仕立、要地を
固、成丈近き者共指揮致、四五千挺も揃、
暁急ぎ、と家後方迄も打揃、移
り候様、との事、

(七) 子三月十七日京師より左之通申来る、

去十三日徳川慶喜より左の通、速に東下の仕向、
別紙老公へ申上、との趣、別紙老公へ申上、
候趣、未タ何の沙汰も無、依之、重役共、
評議、左の通、
指揮、
勅宣も有之、勅書有之、移
勅宣も有之、大樹公より急度、勅書有之、移
之、尚又長州不日、攻入、との風聞、
一、攘夷之儀、敵愾確乎、御鋭意、被為入候
様、被仰出候、
一、攘夷之儀、先月廿七日、勅書之通、
一、横浜鎖港、之儀、大樹公より之文、
一、外国御用掛、被差免候、
一、神奈川、兵庫、両港、鎖港、
一、横浜鎖港、之儀、諸大名、衆議、
一、諸大名、衆議、
一、禁裏守衛、
一、禁裏守衛、
一、禁裏守衛

[illegible]近三字を惜ふと雖も詮なし 十月天白日と雖も 上
處處これ有り什麼有せる手もと一向くれの旅
雅うる哉乃

三ノ十九日

六 嶋津大隅守名薩州候(御馬)侍刀拝領為の御礼
二月廿二日 松平大隅守(修理大夫称ス)殿二條 御城にて召御国家ニ為励精尽力当節ニ
場合ニ至りし候の陽悦の餘 御産間の手自 御刀の拝領 御目見
御馳走ニて蒙 上意修理大夫殿名代松平甲斐守殿
ゐる藩等之仕方ニ候 御満足ニ付の刀の昭差の拝領為の

元 追悼義勇士墓

古之賢者今之愚者孰今之愚者古之忠者孰今前賢
而在後則将奈何也嗚呼醜
虜来航於 皇國三十年許焉當時券親睦者官戮之
而質
神祖之遺律方今說拒絶者官斬之而法五夷之政典
被其斬戮者奸孰之果賢孰愚孰時運變
遷綱紀相軋聖人憂世全誨於後代欲一以賢之也天
之所覆地之所載難(雖)有貴賤之分君臣之等惟若賢愚
忠奸則天實生才豈以階級別之
神祖若在焉鉄鉞之所加何先何後彝倫無常大典矛

循天之鑒不遠聖人將謂之何乎冀北之野可終無良馬

元治甲子仲春日

義有盟社

○元治改元

元治ヲ改元ノ仰出ヲ明日諸侯方得出仕ヲ為ノ事ト

二月廿九日付

○十二月廿九日從飛脚ヲ以稲葉長門守申達

一筆文字之儀被 仰出候ニ付傳奏衆ヲ勘文一通并七号之文字唱候名改一通被

為敲ニ付右七号之内令憚可然旨被 思召候ニ付右号ノ今ニ

於ハ致度其段当地ニ宣ノ上ニ而可御書付ニ和漢ニ付則ヲ敲之一昨廿七日到来ニ付

令写刻ノ如然ル 御上洛 御進発ニ差響候而ハ何分ノ上ニ而

左ニ而ハ尚其ノ地ニ而ノ供之向列共ニ相心得罷

御○奏改遊御返答被仰上

御沙汰書取

稲葉長門守

牧野備前守

井上河内守

板倉周防守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

二月十六日
出格之訳を以布衣勤ル内三百俵ヲ被ル
去ル十五日二條御城ニ 御着加馬被ル為ノ祝儀水ヲ殿始万石已上之面々登 営於席々老中調
二月廿三日 陸奥守差ヲ以
御刀 美濃國兼衡代金二十枚 巻物二十
陸奥守在所ニ而暇ヲ下拝領物被ル 仰付旦ハ留守中ヲ以テ
存上下恐悦ス 仰出ス 二月廿九日
去廿一日 御参内相済二條 御城ニ 勅使ヲ以右大臣ヲ 御
転任右馬寮之儀ヲ 明朔日 被ル 仰付
諸大夫ヲ 仰付
二月九日
預ヲ遣水ヲ神奈川奉行支配組頭
二月廿三日 銀五十枚 照屋卯之郎
綿五十把
二月下旬京都ヲ書状昨三日夜相届ル書被
公方様ノ儀モ先二月下旬 還御之趣ニ而承リ得共未ダ治定ニハ相成ラズ又関白職 東宮
ノ轉任之噂モ有之候ヲ先ヲ得ヲ 還御之祝ヒ難計ル
二月七日泉涌寺ニ 御参詣東本願寺ニハ当寄
同十三日南禅寺内金地院 御宮并知恩院徒
敷ニハ当寄ノ座ル
二月廿日 能勢 金之助
右ヲ長崎表ヘ為ル用ヲ遣ル旨ヲ 仰付ル二月十日出
事ニ座ル兼ル長府之儀モ 勅使相立ル趣ヲ以テ座ル為ル添之花隼ヲ相渡
大膳亮ヲ中事ニ座ヲ置ヘトモ
梅渓右中将殿

長州大膳大夫城ヶ谷治察使ヶ處ヶ遣ヶ

(八)二條ヶ警衛左之通

二條　松平穩岐守　三條ヶ
竹屋口　松平讃岐守　猪熊口
日暮口　井伊掃部頭　西口
清水口
大宮口　土井能登守　丹波口
野口　永井肥前守　南猪熊口
黒門ヶ切　秋元但馬守　三月四日

松平少輔守
柏馬大膳亮
松平紙中守ヶ
青山因幡守
増山對馬守代ヶ
松平周防守
秋元但馬守

(八)子三月京師ヶ了ル前文略

一大坂道頓堀下大和橋中程ヶ西向ヶ梟首被ヶ申ヶ

橫濱商人
伊勢屋
平兵衛

此者兼好吏共同意を以重キ　御國禁を犯ヶ外夷ヶ通商被交易條ヶ方今
ヶ時勢ヶ乍ヶ為莫大ヶ品買ヶ諸價益騰貴ヶ衆万ヶ人民を苦メ賊
ヶ親ヶ深密ヶ御國事をヶ内通ヶ候ヶ旨ヶ重々不届ヶ罪科天誅素ヶ不可
容候ヶ仍ヶ梟首もの也　甲子二月ヶ四日

同日大坂高麗橋西詰ヶ張書ヶト

先年交易被せヶ諸賊有ヶ候ヶ事ヶ札を以其者ヶ罪状を顕ヶ京坂ヶ橋ヶ
張置ヶ候ヶ賊高ヶ者共大ヶ敬畏ヶ候ヶ儀ヶ歎須を以ヶ助命急度改心ヶ
秋ヶ誠ヶ義士潜ヶ有ヶ再交易被せヶ賊數多起ヶ別ヶ京摂関東ヶ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

江別ゟ行へて家多シ一ケ村ゟ奴原拾軒下ハ国ゟ人民ゟ迷惑ゟ有之ゟ
逐一吟味ゟ止不遠天誅ゟ加ヘ誅戮ゟ二ノ令ゟ来首ゟ
又同廿六日朝大坂ゟ有ゟ営ゟ表門ゟ馬駐ゟ傍ゟ有ゟ
咽ゟ貫ゟ相果ゟ由首ゟ落命ゟ
右馬駐ゟ傍ゟ樹ゟ有ゟし跡ゟ遺首ゟ長ク於テ晒ゟ
右ゟ外先ッ異ゟ三月五日舞楽
御条内ゟ有ゟ御略ゟ 御条内ゟ
還御ゟ由陸ゟ積ゟ大坂ゟ紀州ゟ
○ゟ都四ッ谷ゟ岩稲荷ゟ詣多シ警人ゟ
○伊通院ゟ大黒尊像ゟ又ゟ行縢ゟ多ゟ
○世ゟ天気ゟ有ゟ人ゟ佳来多シ花ゟ

○小井山本大谷事已收録今略

入伊勢 御条宮ゟ類宮下朝ゟ通行ゟ

(公)御旅館本陣附

寺町二條妙満寺
千本屋敷
六角堀川東竜ヶ栄次郎
三條寺町誓願寺
出水千本西
綾路堀河東栄正寺
六角大宮西
同丁誓弘寺
六角油小路東
錦大宮西欽浄寺

絞武職 松平大和守
老中 酒井雅楽頭

御側衆 錦大宮西休務寺 土岐下野守
大目付 仏光寺大宮西入命寺 土井備中守
同丁月輪寺 渡辺甲斐守
綾路大宮西光林寺 大久保豊後守
御勘定奉行 猪熊六角下ル事應寺 松平石見守
薬師大宮西正覚寺 同並 立田録介
同丁所光明寺 御目付 鈴木大之進
四條大宮西満ゟ寺 高力直三郎
同丁妙厳寺 小笠原弥八郎
六角油小路東 同丁悟真寺 能勢金ゟ助

御側衆 稲葉兵部少輔
新見伊勢守
村松出羽守
跡部伊賀守
酒井肥前守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

綾小路大宮西光縁寺
日野丁平徳寺
松原大宮西照寺
日野丁中堂寺
綾小路大宮西

御田付
御使番
島田織部
近藤作左エ門　柳馬場押小路
中山藤七郎　松原西洞院東
杢平鎌蔵　綾小路大宮西
御田付
遠山隠岐守

東洞院押小路
高家
品川式部大輔
宮原民部大輔
御持筒頭
市橋傳七郎
御小十人頭
中野播磨守

御池若狭屋敷
知恩院
小川寺ノ内上
上長者丁室町屋敷
寺町広小路

一橋中納言
尾張大納言
紀伊中納言
水戸余四麻呂
守護職
松平肥後守

仏光寺
松原烏帽茶師
北野立本寺
寺町西條大雲院
北野国正寺

松平下総守
榊原式部大輔
丹羽左京大夫
伊達伊豫守
戸澤上総介

東本願寺学寮
二条堀川屋敷
相国寺前屋敷
西本願寺
本能寺
二条川東屋敷
日光御里坊
三条橋東要法寺
竹茶師堀川屋敷
高倉六角屋敷

深川七条真正寺

松平越前守
同　春山獄
島津少将
細川良之助
松平紀伊守
松平阿波守
松平容堂
井伊掃部頭
藤堂和泉守
松平穏岐守
松平讃岐守

鷹ノ羊屋敷
小川上立売上
五條麩屋町本覚寺
祇園下屋敷
三条橋東法皇寺
寺町三条天性寺
下寺町極楽寺
西洞院二条屋敷
油小路九太町上
毀ノ井松原下
神泉苑町西池

松平越中守
阿部主計頭
相馬大膳亮
本多主膳正
秋元但馬守
増山對馬守
土井能登守
松平出羽守
松平丹後守
小出主税
織田山城守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

(三) 長州ヘ御使ヲ以テ被仰出

長州征伐

本使（侍名代）御上使
副使（御添使）

杉孫七郎殿
杉孫七郎殿
杉孫七郎殿
小笠原壱岐守殿
服部久次郎殿

和宮様ノ御名代

三月二十七日江戸ヲ発ス

杉孫七郎殿

人数八人之通

（加州侯名代）
杉孫七郎殿

加州侯ハ来ル二十七日人数ヲ通

紀州侯
杉孫七郎殿
細川越中守殿
杉孫七郎殿
杉孫七郎殿
有馬中務大輔侯
阿部豊後守侯
杉孫七郎殿
杉孫七郎殿

右ヲ津田氏ノ城ヲ一昨朝日第ノ書面ヲ以テ右ヲ物集ヲ為ス

対外
杉孫七郎殿
薩州侯

右ノ三方侯ヨリ出向ヲ雲州侯ヘ此程ノ内意ヲモ以テ御届ノ筋ヲ被申立

右ヲ以テ長州ノ征伐ヲ遣ス筋ニ於テハ又ヽ異説ヲモ一ノ有之時ニ内々密ニ御届ヲ得ヲモ実

説ラシキ事ヲ拵ヘヲ以テ去来後ノ辺ニ作出シ候ヲ聞ヲ後ヲ不ヲ止ノ拵ヲ

ヲモ如何ヲ有ル先ヲ向ノ為ヲ上ト

(四)

右ヲノ上京ヲ成ヲ疏ヲ孰杉孫七郎ヲ山淳ヲノ国ノ堅ノ故大坂ニノ国方侯ヨリ在ヲ被ヲ召

柳ヲノ出京ヲ節十山時ヲヲノ公道ヲ為ヲ然ヲ上ヲ

ヲ為ヲ為ヲ文書ヲ上中ヲノ征伐ヲ以テ未ヲ容易ヲ御ヲ

毛利左京亮侯

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

仮称実子名を以て先唐人[illegible]を立ら[illegible]
[illegible]ても[illegible]ず[illegible]ず[illegible]ず

(八)実説

長州ヨリ仙台ヘ出張ノ使節ト京都ニ於テ吉川ヲ介ケ
共ヲ以テ幕府ヘ稟ノ上ノ和議ニ決シ幕府ヨリ
次第長州ヘ仕戻リタル上長州ヨリ破約兵ヲ
石ヲ次第故　還御ニ相ナル

(九)土井宗之丞

石州三州碧海郡苅谷
高二万三千石

右長州ヘ一味ノ多ヨリ家老ノ内訴ノ次第
第ノ事ニ付人数ヲ以テ押寄ノ上
一味ノ者ヲ連判帳ヲ有之ヲ申渡ノ自殺連判帳ヲ血汐ノ
因今朝石ノ義ト申ス者ヲ以テ

土井大隅守

(十)内藤備後守被申渡書付

以書付ヲ以申入候今日拙者ヲ以テ被仰渡ノ
ノ老中方列座周防守殿ヨリ和議別条ト相成
御所ヨリ　仰出ノ書付写等　御渡

後大目付等ヨリ手数在番ヲ以論立国在邑ヲ
速ヲ出仕ノ事ニ付一通ヲ速ヲ周防守殿ヨリ
尚ヲ以返却ノ事ト

三月六日

御名々様　松平和泉守様　稲葉美濃守様
本多肥後守様　本多肥前守様　牧野主馬頭様

右ノ通リ被仰渡ノ事ニ付御名々様ヨリ
於ヲ以テ御手ヲ以テ一通ヲ差上ノ事ニ御治ノ

内藤備後守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

甲子二月廿二條一席一役ニ、作候

ふる友等相ともに一流にあるべし上月書ニ老中方ニ以傳左の一ヶ條ニ而相ともに各自ニ存ずる事又在邑ニ而ハ方ニ言及おゐて中ニ而ハ

一ヶ條ニ而

御一所ゟ　作左ヱ門ニ而ハ字訓ニ
御使ニ　作上ニ而ハ字ニ
而ハ字ニ而ハ字ニ

御一所ゟ　作左ヱ門ニ而ハ字

去十四日

勅答書ニ而ハ横濱鎖港ニ一條ハ條理ニ而ハ一格中ニ而ハ言ニ而ハ訳ニ而ハ如ニ而ハ鎖港ニ而ハ成功ニ而ハ言ニ而ハ事ニ而ハ一ヶ條ニ而ハ書ニ而ハ事ニ而ハ言ニ而ハ旨ニ而ハ

御所ニ而ハ勉勵ニ而ハ

之上ニ

御所ニ而ハ

○横濱鎖港ニ而ハ事ニ而ハ一ヶ條ニ而ハ書ニ而ハ事ニ而ハ成功ニ而ハ言ニ而ハ事ニ而ハ

ニ而ハ絶ニ而ハ

叡聞ニ而ハ

叡慮ニ而ハ

勢ニ而ハ上。

御一所ゟ　作左ヱ門ニ而ハ字

去ル十四日第ニ而ハ

勅答書ニ而ハ横濱鎖港ニ一條ニ而ハ

ニ而ハ

節ニ而ハ立

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

聖諭の条傳え奉畏仕候段
仮元実践候ニ付等ト候ニ付以上

臣 家茂

○横濱湊ニ英
御所ゟ 仰出ニ付写
心得為ニ一通被下事

二月十一日

(九)在番某氏ゟ
三月十日時刻頃ゟ築地御本屋敷ゟ焼出ニ付
おゝ堂残ハ字船家ゟ残ハ焼失火元
ハ蘭ヤ外ニ道具多ゟハ残ル
一築地火ゟ出候節ハ埴生家ニ御移ニ
をゝ石炭ニ火付候ニ付近辺焼
一三月十三日 八半時ゟ剛ゟ出火
前ハ岸西宮ニ而ゟ
一 十日夜ゟ西北ゟ出火ニ而風ゟ
当ニ家移ニ迄焼
一 四日朝ゟ四山ニ焼煙満天日光ヲ不見
ゟ如斯夜ニ入ニ消ル 此日ハ朝ゟ
三月廿日晩著
上野寺移ニ本化静明院ニ
三月廿四日高田ゟ仏下焼失ニ

町方千何百軒　百姓家百何千軒　死人四五人

九二　偶成

履霜已首四十年　失馭到今八歳前　言順名正已足矣　交高利喜
猶茫然仰關雲上　雖懸隔微義至仁可相聯　竊擬忠謀有所得
將揮心血許皇天

是之武州本庄在血洗嶋尾高新左衛書之

青雲稿送稿上来之一件深掌之御評之
而我器量之乏千金之寄物之時之
心のうち一字も不知為之

九三

御尚守中為御守衛中納言名代同性弾正
今日改為参内申上候以上

三月十九日

九四

私儀　御上洛御留守中為御守衛
仰付候処　御勤も相済　御帰陣之節
御家中御警固之儀　当地御留守居
御手伝之儀　御苦労被思召候以上

三月十九日

加賀中納言内
加次尾十左衛門

私儀　御上洛御留守中為御守衛
仰付候処　御勤も相済　御帰陣之節
御家中御警固之儀　当地御留守居
御手伝之儀　御苦労被思召候以上

三月十九日

右之通飛弾守

同日夕御寺方呼寄ら

条勅命之趣及申上為御機嫌伺御使者中一万一郎常

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

去ル戌九月中ヨリ御用ニ付三河国岡崎城詰御用並弐千五百石ヨリ八拾石ヲ以八合ノ代官仰付奈半利ノ儀ハ其月ヨリ追テ御沙汰ニ付詰番相勤申ハ勿論ニ候ヘトモ家事多ヨリ致シ候ニ付当分ノ内ハ

三月

阿部越前守家来ノ内意

岩松源次郎儀在家ニ、ヨリ申渡之趣ヲ申勧ムル再三ノ断ニ候ヘトモ不仕ヨリ外ニ交代仕右ニ旅用ヲ遣シ追ヨリ引ノ手ヲ

上ル以上

三月廿二日

山口城太宗大夫

(九八)

奥松院様御不快ニ付為御看病御服ノ御頒ノ通當廿一日ヨリ御発駕ノ節　奥松院様御供仕リ候ニ付テハ　御発駕後ノ自然ノ御手薄ニ相成候ニ付テハ　御発駕後ノ自然ノ御手薄ニ相成候ニ付テハ　御発駕後ノ自然ノ御手薄ニ相成候ニ付テハ

右ノ段御届申上候　以上

白川俊次郎

(九九)

御届　辺衣相用ヒ候儀ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ

一廿四日ヨリ廿六日迄三日間　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ

一三月廿四日ヨリ廿六日迄三日間　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ　御先代様ノ御忌中ニ付テハ

(一〇〇)

大日寺様ヘ御留守居ヨリ御届書　三月十七日

當子年京都御警衛在京ニ付　御先代様ノ御忌中ニ付テハ

杉本甲斐守

杉本陽岐守

大久保加賀守様御先代

七月廿九日迄御警衛

堀田弥之丞

七月廿九日迄御警衛

真田伊澤守

杉本甲斐守様御先代

十月廿三日迄御警衛

杉本甲斐守

杉本陽岐守様御先代

七月廿九日迄御警衛

杉本甲斐守

杉本甲斐守様御先代

二月廿三日迄御警衛

杉本甲斐守

杉本甲斐守様御先代

四月廿七月迄御警衛

杉本陽岐守

大久保加賀守様御先代

七月廿九月迄御警衛

堀田弥之丞

七月廿九日迄御警衛

真田伊澤守

杉本甲斐守様御先代

十月廿三日迄御警衛

杉本甲斐守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

右之通被 仰出候事

右之通系水野和泉守被 仰渡候

公卿之事

(九一)在府某氏之東 三月廿三日晚三字過

上野吉祥院不化靜明坊ハ友弥勢忠之者之旨右同人ヲ親ハ成田不動之門前町ニ罷在ル者之由ニ浪人共モ一二十不ニ揃ヲ改兵器ホ多分ニ所持致シ有之ニ付上納ヲ申付色々ニ召遣右ニ背ク者ハ殺ス旨条理ハ下知ニ應シ兼佐倉侯ヨリ外宅高ニ諸侯ヨリ屋敷人數出佐倉多ク一夏色ニ顕シ多夏死人ヲ五ニテ先方ニテ右ニ准シ死失ル者ヲヤヲ田多分水戸浪人ヲヲ不程多ク了田ニ者ヲ

(九二)問策十則

一昔者元人贈書于我 天朝欲答之北條時宗以其書辞無禮執爲不可且斬其使以嚴武備幕府有此英斷故當元人入寇之日 亀山帝願以身易國難上下一和其至誠感神當時之大風非偶然敢問今日何爲則上下一和如弘安之時乎

元人欲以貢称臣令諸寺大七和親通商事体前條

廟堂有策

一自癸丑有外夷之事以来諸公皆曰武備之功今已十二年而諸公猶主張前説愚謂自今後之十二年而武備豈能充實乎敢問武備充実之策略緩急當如之何

一防盜入家者不固守門戸而唯守堂與室余未之聞也京師室

人有精神當衛自捷

也浪花堂也紀阿淡之間豐豫之間長豐之間前兩也若毋則後門也不先議此數處之守衛而獨論攝海之防禦愚竊以爲非計之得者敢問諸君以爲如何

能保雖美之策不可拘閉鎖

一有攘夷之策恐難成苟償金之鎖港而已則莫如鎖箱館不早鎖箱館則蝦夷令爲魯西亞之有矣豈非可寒心歟敢問諸君以爲如何

雖稍似知言豈文悠字

一二百餘年之江戶地氣叅泄無餘而人心萎靡不振如今日矣今因大城有災宜以江戶爲戰場否則雖橫濱鎖港恐難成敢問諸君以爲如何

一古語云寧爲玉碎勿爲瓦全今日天下之形勢爲瓦次

無不能得全之理爲玉却有得全之理何憚而不爲之乎諸君以爲如何

一聖賢之謀事論是非而不論利害今日攘夷之議論紛々不次者盖論利害而不論是非也且論其利害也非真知利害者諸君以爲如何

利害之利与利欲之利不同是故利則是害則非

一立國之道有強而不在大皇國之在五大州中固不可謂大然而自古不受外國侮者以其強也今日之急務無　于強國之策強國之策當如之何

光明正大強京焉暗昧邪僻弱莫是焉

一昔者周之衰也楚子臨周境問鼎之輕重大小王孫滿雄辨以却之今醜虜之無禮無義豈特楚子之比乎乃如

何書紀内稚矛楚事下一王孫滿泥只

如今日我屈于彼而不止則他日虜臨
畿内問
三種神器之大小輕重愚謂雖有王(百)孫滿沢不能却之
矣敢問諸君能却之否
一近日有外夷襲来于長州之説苟、于
皇國中者誰忍傍觀坐視乎聞有曰宜使外夷伐長州
者余未知其真僞敢問諸君有此現否
元治紀元春三月望後三
右者土肥謙藏之問策三月十八日清水(坂)於暘亭正義會
山部安達土肥猪王野沖出席他若干十二候人數凡四十四人ト云云
右之因州侯内命同藩中會頭ゝて諸藩會合之上ゟ云出ぬ

○問策十則ゝ尾州ゝ周旋方即答之写

一二則　此二件在踈死地
三則　廟議不及此乎
四則　是策一件片言不可盡也
五則　暫不若鑓京摂也
六則　鎖国変則為全矣
七則　又多伐狡旦不返兵利害不論可也
八則　亦在鎖國
九則　國是定上下和則何物狡児問鴨軽主乎
十則　匍匐可救之也

以上

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

尾張殿建白

謹而奉献言ハ方今切迫ノ形勢多端難儘述ハ得共根元ヲ夷患ニ有テ掃攘ノ後ニ有而已素ヨリ　聖明之　勅意ヲ以為在今更申上ハ返テ得芟古ヨリ已ヲ知力ヲ量ルヲ要ト仕ハ得ヲ其差略ヲ又不得止義ヲ奉存ハ就而ヲ他港ヲ多鎖閉而已ヲ以テ　帝光奉存ハ若此議論相動ハ而已ヲ国國ノ人心治マラ無一ノ申長刀ヲ御所置ヲ以テ已ヲ以テ悪ヲ施ヲ以テ情ヲ御怒ヲ遊畢竟内乱ヲ不招外夷ヲ術中ヲ不陥故ヲ遊義ヲ為ヲ且又論ヲ藩ヲ形勢富強ハ称ヲ衰弱ハ多ハ共侮ヲ受ル連ヲ外夷ヲ軽侮ヲ難防事トナルハ元何モ領ヲ於ヲ已ヲ富強ヲ不顧故ハ為ヲ将ヲ添世俗ハ得ヲ何ヲ一ニ事ヲ年久安ニ負ヒ游惰奢靡習深ク乱ヲ成ハ故改革ヲ一新行届ク偸安ヲ再流ヲ一ハ次第ヲ傷ヲ発ヲ甚ヲ賢ヲ者ヲ此様

一 攘夷ハ名ニ而ハ人心一致ニ目途ハ立ス実ニ容易ニ可成ニハ非ス実ニ攘夷ハ数年来ノ口実ニ而已ニ経得ハ既ニ昨年

叡慮御遵奉攘夷ニ　台命ニ而ハ物議紛々ニ而一致ニ目途有之間敷ニ付攘夷ニ

一 三港ノ外猥ニ砲砲ニ夷船ハ掃攘ノ事

備前侯建白

一 攘夷ハ名ニ而ハ人心一致ニ目途ハ立ス実ニ容易ニ可成ニハ非ス実ニ攘夷ハ数年来ノ口実ニ而已ニ経得ハ既ニ昨年

叡慮御遵奉攘夷ニ　台命ニ而ハ物議紛々ニ而一致ニ目途有之間敷ニ付攘夷ニ

一 三港ノ外猥ニ砲砲ニ夷船ハ掃攘ノ事

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

大義外夷ニも御示シ相成候ハヽ三陸之事抔ハ暫ク之処免シ
相成候ハヽ彼之軽侮を制シ候ニ
至旦撲実御奉　　朝之御威も相
振ひ候ニより忽兵端を相開キ一ノ
要地を敵手ニ委ス之患ひ無之ハ勿論ニ
御座候ニ付列藩へ御布告ニ相成
候ハヽ国内勃発武備相整候情を一洗ニも相成
権ニ相成一ツ之義ニ候ハヽ
一鎖港之御実行相立候御名義ニ候ハヽ
此義使節帰帆之上御取調ニ相成候ハヽ
ヲヲ拒絶相成ニ候ハヽ御実意ニ
疑惑を生シ候ニ論義ニ及候ニ
候将又外夷ニ対シ曲直を
天朝ニ於ケル大義ニ比較仕候ニ軽重大小明白ニ相分候事ニ
ハ候ハヽ之ニ候ハヽ早ニ御実効相顕レ候義今日ニ御名義ニ
一江戸御城御修理等ニハ第ニ之儀ニハ候ヘ共
鎖港御談判ニ着手ニ相成候ニ於テハ
御見込之通ニ候ハヽ彼ニ於テも
ニ候ハヽ之ニ候ハヽ
作事ニ候ハヽ
一宮方堂上ニ於ホ列藩之
此義ハ

申ト今般　公武御一和幕府ト御委任ヲ受ケ上ハ内人サヘ
幕府ノ命ヲ重　大樹公御下坂御懇親ヲ御方
帝都ヘ御滞在被仰付ノ事ニテ御学統ヲ傍ラ不忘万億一途ヲ
生ノ結相成ノ基ヲト等

一　列藩始国武備充実ノ一ノ政ノ事
近来洋夷ト申唱不弁理ノ者ヲ各藩ノ服ヲ
作出諸ヘ始各藩ノ備ヲ厳ニシ国力不尽ヲ務
ハ幕府ノ御為ヲ結幕ノ為ヲ思ヒ行届ク厳重ノ一ノ者ハ
度旦用物価騰貴不安ノ世柄ヲ各ヘ
一　長州御処置ノ事
左説ニ拠ル長防士民ヲ始メテ一途ニ必死ヲ初極テ朝実ヘ
ハ万御寛典ヲ次ニ寛猛ノ心ヲ激シ内乱ヲ備トモ相成一ヲトヲ御
寛大ノ義ヲ不及申素ヨリ御仁慈ノ御趣意ニ候ヘ長州父子ノ不及ノ長防士民ヲモ近耳
ヘ御基本御安定ニ相成ヘヲ長州父子ノ不及ノ長防士民ヲモ近耳
心可仕ヲト遠察仕候間一応御糺問ヲ上速ニ入京　御免ヲ　作州ノ拝奉
存ル　朝廷ニ　作上列藩私心ヲ挟ミ結局心合仕ル者ヲ御処
置肝要ノ義ト存ル

子三月

松平備前守

九五

筑州家浪士京都辺ニ昨年ノ騒動ニ乗ジ私ニ兵ヲ
ヲ入京相成ヲ如ク当十四日夜何ヲ
ヲ破リ右ノ者ヲ取ニ出シ十五日ニ国家ノ
奉行牧一ノヲ七百石ノ

至る信者ニ毎朝海辺ニ出浴シ汲ミ神前ニ献ル事ハ如何ニ寒冷ト雖モ怠ル事ナク又大祓ヲ唱ヘ千果ヲ浪士ニ施ス事亦怠ラス且ツ家中追々数多津々浦々ニ船ヲ派シ諸国ノ形勢ヲ探索シ又ハ山谷ヲ厭ハス人煙ノ稀ナル地ニ至ル迄ノ事ニテ浪士ノ手下ノ者ニ逢ヒ来ル者ニ逢ヒ去ル者ニ逢ヒ或ハ之ヲ尋ネ或ハ之ヲ送リ或ハ之ヲ迎ヒ又ハ之ヲ留メ又ハ之ヲ追ヒ又ハ之ヲ捕ヘ又ハ之ヲ縛シ又ハ之ヲ殺ス等ノ事ニ至ル迄大混乱ニ紛雑シ大変ニ及ヒシ事ハ申ス迄モ無キ事ナカラ其中ニ於テ尤モ困難ヲ極メシ事ハ和宮様御下向ノ節ニ勝ル事ハ無カリシト云フ位ノ事ニテ一ト口ニハ尽シ難キ程ノ事ナリシト云フ

三月廿日出

御沙汰書 自三月十三日 至同晦日

三月十三日 甲子 御町奉行ノ代官兼帯

中奥ノ衆

小納戸

ト召出ノ小納戸

三月十三日夜八ツ時頃ヨリ日本橋通リ南ノ方ヨリ出火ニテ南ノ方ヘ延ヒ翌朝代官屋敷ヨリ明ル四日迄ニ消火候

神奈川奉行

三月十七日来ル四月於日光山 権現様二百五十回忌ニ付御奉行板倉周防守様御名代諏訪内匠頭様御名代トシテ

三月十八日 勝手方 日下数馬

病気ニ付御名代ノ義ニ付御免ノ向御側詰

芙手 福田甲斐守

小納戸 大澤主馬

書院番 松平金之助

小納戸 中根徳次郎

西丸御書院番 三好惇次郎

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

三月四日ヨリ
阿部播ノ下家相続病中願之通教前守　阿部越前守
白川十石
名知三千石依願長吉郎ヲ相続　阿部長吉郎
外国奉行　三月十五日　諸大夫衛府守ト仍　勤仕並寄合学問所頭取格役　土民部

一先手通人

西丸ノ書院ヲ
三月十四日　西丸ノ書院ヲ
町奉行阿部教家守跡
三月十三日　参勤ヲ免

今般ノ軍艦操練所焼失ノ件当分之内同所南隣増地ヘ仮学舎ヲ設ケ
古来ノ相成ノ術算術測量造船学一六三八、船道具運用学蒸気機関学二七五十海
上砲術学ノ四九、大小砲船打調練ヲ一六、右ヲ割之通相心得当月廿日ヨリ同所ヘ毎教

勤仕並寄合
水野清六
上野親三郎
平岡丹波守
勤仕並寄合ノ格
都筑駿河守
米穀役
上杉弾正大弼

誓古一ノ者ヲ
越後高田去十四日夜善寺町ヨリ出火侍屋敷拾軒　足軽長屋拾軒　町家千三百七十
軒　石姓家百八十五軒　焼死人男一人　女二人
百九十七軒　右之通於京都所々焼失候儀ハ参勤ヲ免
三月廿八日　ヨリ暇ヲ賜ル
参勤後二十把金馬代
堺奉行鳥居越前守跡
あらため
三月廿九日　鎗掌下通　矛万吉又表ヲ
治ニ
作事遣ノ者ヲ
作事奉行
水野壱岐守　牧野讃岐守
鯖江ニ万石
間部萬治　瀧川主殿

松平三河守
有馬遠江守
松平鎮三郎
所領ニ万石
七半時品川ヘ出帆
ヨリ軍艦ニ天文方七日四時ヨリ出帆九日
三月九日

西暦一千八百六十四年第四月六日
我元治元年甲子三月初日
神奈川官版

日本衆人の説に従へば大毛利（近頃名高き長門の國主松平大膳大夫の略称なり）は古来名誉の家柄を辱うしめし外国人に若干の金を許し改革の意に返し正大光明の道理を以て外国人を扶け日本國史に千歳不朽の名をかゝやかす由を称美をなす

○近頃風説にて帝及び大君の威光をも恐れず幾多の大名等が勝手次第の政をなす歎はし

○天皇ゟ善く服従し諸事國ゟの命令に遵奉せん為に由て國ゟ改革して自ら治むる日本政府と僭称するまゝを得ざるなり

○毛利既に国政の激変を銷却し外国人の通行を許さゝるに於ては其の國永く治まるの砲発の下に来るものなきを何慶の私ゟ相い慮りて急ぐことを奉称ゝ

元に復して薩と為すまでを謀るべし○法の一般は毛利の家を
亡すを以て第一の主旨とせられしより今日薩土の大名大に畏れ
よし○薩と いつ迄も右様の所業を行ふ事を許すべからず○近
日薩より帝及び大君の許へ出せる建白の趣意は長州を
寛典に処し兵庫開港の儀は決して許容あるまじき旨を
敷申す故 兵士を命じ速に征伐を遂げんとの方略を定めし程
土佐及び其外より段々周旋に及び評判の多き最中なり
○長州の一件は暴を以て暴を制するの筆を削ぬ事勿論
書を俟ず然るに薩の如きは其暴を丁寧に言語を
もて飾り兵を用ひずして其罪を許さしむるに於ては
今迄踏ふみ倒したる日和見小藩と雖共下関の海峡を通行
せずして能く毛利の西人西豪方の手
人ともを改革改正して万人と共に遂に毛利
をして降参にも至らしむる方略の如き風
説と○北方略の実化に施さるる時は大君の憤る実情
出ると否とに拘らず帝並に大君の為に毛利の為にも
皇帝守護の役を勤め 政務改革 立憲の都合
を以後と為すべし○旧本士人は大君に於いまことの
はらを以て一統と方今江戸に在るを以て
○江戸の西城一名西丸大急にて造営をとり詰職人弥休日
無く○橋濱街中新店等工作 新来の建てるものの多くし
○法王帝より之御書を以今月末より諸職人等出のめ〻業致

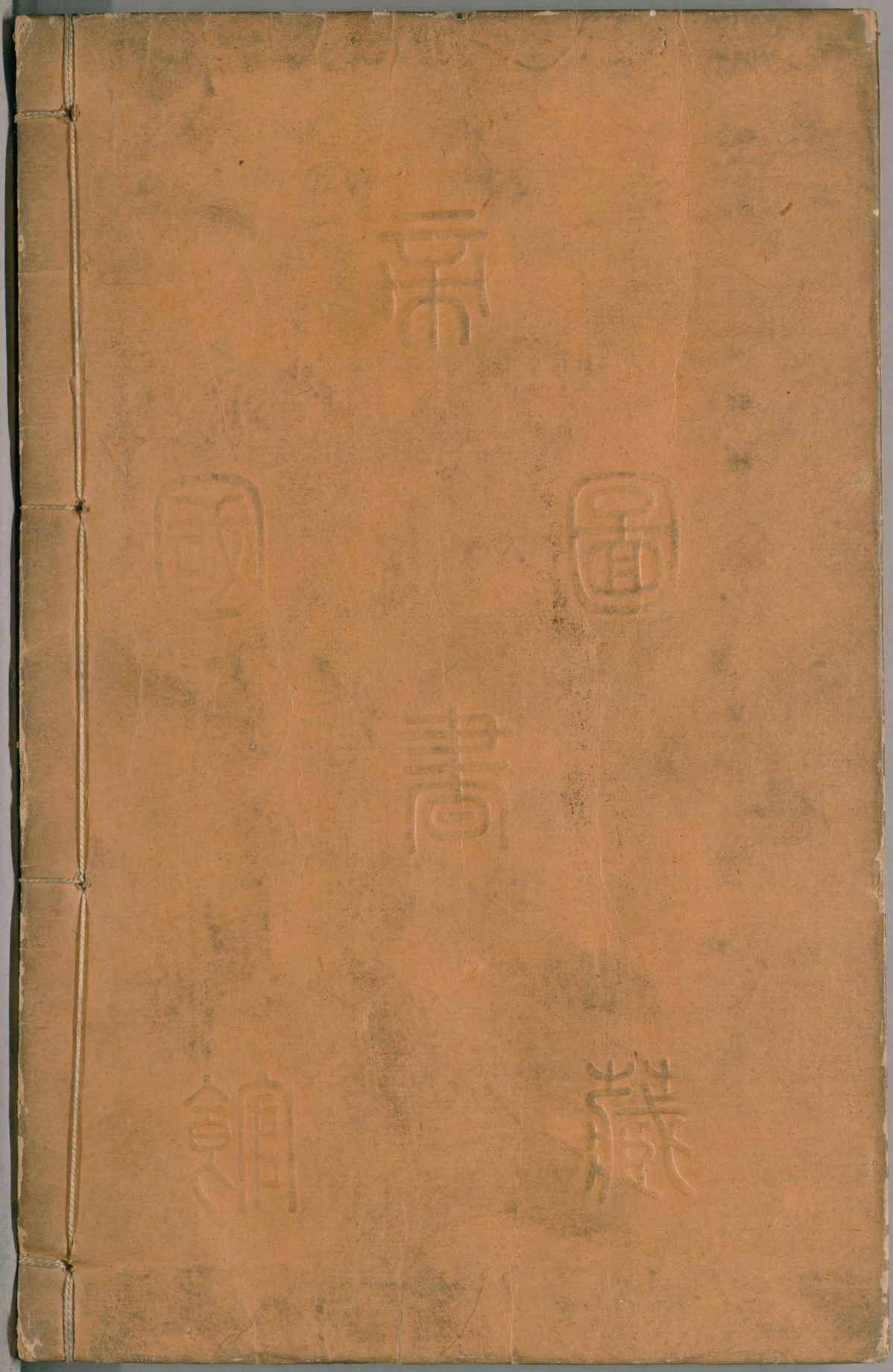
そへきうを載そう　○東の土人、詩職人の運上銀を出来て
ず移くの事に付き近年詩職業す
著しき事有そうあり　○あるを能有日本人、西洋のるに通
信そくさ雷気機の気流をなそそ我堂に新奇甲うを全く
日本人のる時のごとくして雷気機をもて作まるあり有よて私をとも
出来よう之を使用そそものれ
廃て用ひざるもの私をうれ

神田鍛冶

836
209
3

国立国会図書館　　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用